



特71

475

歙書齋全錄宗匠完
錦七卷三郎校正

校
正
倪
諧
七
部
集
全

東京 東生書齋印

特別
475



77W10498

七部集序

さういふ日、ものへまかりけるに、子周道のは
とに行あふ。此ごろ聞へあはすべき事侍り
て、あなぐりもどめつとて、ちひとまふんつ
とみどり出す。これなんばせを葉の、廣く世
ふもて傳へたるなぐつのふみにして、此道
を翫へる人の、枕草紙とすべきものながら、
そのまぎくさはなれ、たはやすく身に
そへがたかめるを、かくひとつ冊子となし

て風にうそふき雲に詠るの、中だちとせん
とす、そのよしをらむくかはしめにしるし
たひてんやとらふ、そのれ紙魚てふ虫のす
くせありて、ふるはうこ好とらへとも、いま
たはいかいの道にかくばらす、ひとにした
かいとバによるの篇をさへこもまへそれば
みたりのことくはへん事は、はくかりの關
はくかりなきにしもあらざめれど、ひたす
らに、いなのおこ原になみ侍らば、中く博

士めきてもや聞へん、むかし蕭釣は、五經を
はへのかしらに書て、たなこびの箱に納め、
いま子周の七部をねつみのあとにきぎみて
つねに懐にせんぞす、七部は滑稽の七經と
もいはんか、唐大和そのさかいかはるとい
へども、其心同しかるへし、はやく櫻木にち
りばめくて風月のさけきたすけよと云

警者水母散人吳竹のよつやの里に志るぞ

俳諧校訂七部集

夜雪庵金羅宗匠校閱

錦花庵三朗校正

春の白

曙見むと人くの戸扣あひて熱田のかたにゆきぬ渡も舟さほがしくなりゆく比并松のかたも見へはたりていとどのとるなり重五か枝折をける竹漕ほとちかきにたちよりげさの氣しきをれもひ出侍る

二月十八日

春めくや人さまくの伊勢参り	荷	分
櫻ちる中馬ながく連	重	五
山がすむ月一時に館立て	雨	桐
鑑寺がらの火にあたるなり	李	風
しほ風によくく聞は鶴さく	昌	圭
くもりに沖の岩黒く見え	執	筆
須摩寺に汗の惟子脱かへむ	重	五
をのくなみた笛をいたく	荷	分
文王のはやしにけふも土へりて	李	風
雨の東の角のなき草	雨	桐
肌寒み一度は骨をほどく世に	荷	分
傾城乳をかくす晨明	昌	圭

霧拂ふ鏡に人の影移り 雨桐
 わやくとのみ御輿かく里 重五
 鳥居より半道奥の砂行て 昌圭
 花に長男の帯鶯あくる比 李風
 柳よき陰うこしらも鞠なきや 重五
 入かゝる日に蝶いろくなり 荷兮
 うつかりて麥なくる家に連待て 李風
 かほ懐に梓さゝある 雨桐
 黒かみをたはぬる程に切残し 荷兮
 いともかしこき五位の針立 昌圭
 松の木に宮司か門はうつふきて 雨桐
 はたしのあとも見へぬ時雨う 重五

朝朗豆腐を鶯にとられけり 昌圭
 念佛寒げに秋あはれなり 李風
 穂蓼生ふ藏に住かに詫ながく 重五
 我名を橋の名によぼる月 荷兮
 傘の内近付になる雨の暮に 李風
 朝熊おくり出るほくく 雨桐
 ほとさす西行ならば哥讀む 荷兮
 釣瓶ひとつを二人してわけ 昌圭
 世にあわぬ局涙に年とりて 雨桐
 紀念にもらう嵯峨の莖烟 重五
 いく春を花と竹とにいろがしく 昌圭
 弟も兄も鳥とりにゆく 李風

三月六日野水亭にて
 奈良阪や畑うつ山の八重さくら 旦 蕨
 おもしろふかすむかたくの鐘 野 水
 春の旅節供なるらん袴着く 荷 兮
 口すくへき清水なかるゝ 越 人
 松風にたをれぬ程の酒の酔 羽 笠
 賣残したる虫はなつ月 勸 筆
 笠白き太秦祭過にけり 野 水
 菊ある垣によい子見てをく 旦 蕨
 表町ゆつりて二人髪刺ん 越 人
 曉いかに車ゆくすし 荷 兮
 鱧負ふて大津の濱に入にける 旦 蕨

何やら聞む我國の聲 越 人
 旅衣あたまはかゝを蚊屋かりて 羽 笠
 萩ふみたをす万日のはら 野 水
 里人に薦を施す秋の雨 越 人
 月あき浪に重石をく橋 羽 笠
 ころびたる木の根に花の鮎とらむ 野 水
 調盡せる春の湯の山 旦 蕨
 のとけしや築紫の袂伊勢の帯 越 人
 内待のゑらふ代々の肩の圖 荷 兮
 物思ふ軍の中は片脇に 羽 笠
 名も勝栗とちと申上ヶ 野 水
 大年は念佛となふる惠美須棚 旦 蕨

ものど無我によき隣なり
越人
朝夕の若葉のたえに枸杞うつて
荷兮
みやこに廿日はやき麥の粉
羽笠
一夜かす宿は馬かふ寺なれや
野水
こは魂まつるきさらぎの月
且藁
陽炎のもへ残りたる夫婦にて
越人
春雨袖に御歌いたく
荷兮
田を持って花見る里に生けり
羽笠
力の筋をつさし中の子
野水
漣や三井の末寺の跡どりに
且藁
高びくのみろ雪の山く
越人
見つけたり廿九日の月寒き
荷兮

君のつとめに氷ふみわけ
羽笠

三月十六日且藁か田家にとまりて
蛙のみ聞てゆゝしき寢覺哉野水
額にあたる春雨のもり
且藁
蕨煮る岩木の臭き宿かりて
越人
ましく人を見たる馬の子
荷兮
立て乗る渡しの船の月影に
冬文
蘆の穂を摺る傘の端
執筆
磯際に施餓鬼の僧の集りて
且藁
岩の間より藏見ゆる里
野水
雨の日も瓶焼やらむ煙だつ
荷兮

つらく一期聲の名もなし 荷 兮
 我春の若水汲に晝起て 越 人
 餅をくひツ、いはふ君か代 且 藁
 山は花所残らす遊ふ日ろ 冬 文
 曇すてらす雲雀鳴あり 荷 兮

三月十九日舟泉亭

山ふきのあふなき岨のくつくを哉 越 人
 蝶水のみにおるゝ岩はし 舟 泉
 ささらさや餅洒すへき雪ありて 殖 雪
 行幸のため洗ふ土器 蝨 髭
 朔日と鷹もつ鍛冶のいかめしく 荷 兮

追加

春

月なき空の門はやくあけ 執 筆
 昌陸の松とは盡ぬ御代の松 利 重
 元日の木の間の競馬足ゆるし 重 五
 初春の遠里牛のあき日哉 昌 圭
 けさの松海は程あり麥の原 雨 桐
 門は松芍薬園の雪寒し 舟 泉
 鯉の音水玉の闇く梅白し 羽 笠
 舟くの小松に雪の残りけり 且 藁
 曙の人顔牡丹霞にひらきけり 杜 園
 腰てらす元日里の眠りかな 犀 夕
 星はらくかすまぬ先の四方の宮 吞 霞
 げふとても小松負らん牛の夢 殖 雪

朝日二分柳の動く匂ひかな 荷
 先明て野の末ひくき霞哉 同
 芹摘とてこけて酒なき瓢かな 且
 のかれたる人の許へ行とて 蕪
 見返れば白壁いやし夕霞 越
 古池や蛙とひとむ水のねと 芭
 傘張の眠り胡蝶のやどり哉 蕉
 山や花墙根くの酒はやし 重
 花に埋れて夢より直に死んか 龜
 足跡に櫻を曲る菴二つ 越
 麓寺かくれぬものは櫻哉 杜
 覆まて櫻の遅き詠かな 李
 荷 風 國 人 洞 五 蕉 人 蕪

春野吟

餞別

夏

武藏坊を
とふらふ

藤の花たゝうつふひて別哉 越
 山畑の茶つみをかさす夕日哉 重
 蚊ひとつに寝られぬ夜半る春の暮 同
 ほとゝさすろの山鳥の尾はながし 九
 ほとゝきすすさゆのみ焼てぬる夜哉 李
 かつこ鳥板屋の背戸の一里塚 越
 うれしきは葉かくれ梅の一つさか 杜
 若竹のうらふみたるは雀か那 龜
 傘をたゝまて螢見る夜か那 舟
 すゝかけやしてゆく空の衣川 商
 逢坂の夜は笠見ゆる程に明也 露
 馬替ておくれたりけり夏の月 殖
 雪

老聃曰知足之足常足

夕かほに雑炊黒き藁屋哉 越人
 帯木の微雨とほれて鳴蚊哉 柳雨
 はしき木はなかむる中に昏にけり 塵交
 萱艸は随分暑き花のけふ 荷兮
 蓮池の深さわする、浮葉哉 同
 曉の夏陰茶屋の遅きか那 昌圭
 夏川の音又宿かる木曾路哉 重五
 辟喻品の三界無安猶如火宅といへ
 る心を
 六月の汗ぬくひ居る臺か那 越人
 背戸の知なすひ黄はみてきりくす 旦藁

秋

炙家の玉祭

魂祭はしらに向ふ夕べか那 越人
 尸きしてまた一寝入する夜哉 雨桐
 雲折く人を休むる月見哉 芭蕉
 山寺に米つくほどの月夜哉 越人
 瓦ぶく家も面白や秋の月 野水
 八島をろける屏風の繪を見て
 具足若た顔のみ多し月見哉 同
 こぬ殿を唐黍高し見あろさむ 荷兮
 秋ひとり琴柱はつれて寐ぬ夜哉 荷兮
 朝顔は末一りに成にけり 舟泉
 馬はぬれ牛は夕日の村しくれ 杜園
 芭蕉翁を宿し侍りて

待戀

閑居増戀

冬

霜寒き旅寐に蚊屋をきせ申 如行
 雪の原朝貌の此の薄か那 昌琴
 馬をさへなかむる雪のあしる哉 芭蕉
 行燈の煤けり寒き雪のぐれ 越人
 芭蕉翁をおくりてかへる時
 此比の氷ふみわる名残か那 社國
 隠士にかりなる室をもうけて
 あたらしき茶袋一つ冬籠 荷兮

◎冬の日

笠は長途の雨に本ころひ紙衣はどまり
 くのおらしにもめとり健つくしたる
 わひ人我さへあわれにおほえける昔夜哥

の才士此國にたとりし事を不圖をもひ
 出て申侍る
 狂句こからしの身は竹齋に似たる哉 芭蕉
 たそやとはしるうさの山茶花 野水
 有明の主水に酒屋つくらせて 荷兮
 かしらの露をふるふあらむま 重五
 朝鮮の厚ろりすゝきのにはひあき 社國
 日のちりくりに野に米を刈 正平
 わのいほと驚にやとすあたりにて 野水
 髪ばやすまをしのふ身のほど 芭蕉
 いつはりのつらしと乳をしかりすて 重五
 さねぬろとはうすこくどなく 荷兮

影法のおかつきさむく火を焼て 芭蕉
 あるしはひんにたねも虚家 杜國
 田中なるこまんか柳落るこら 荷兮
 霧にふね引人はちんはか 野水
 たうかれを横になかむる月ほろし 杜國
 となりさかしき町に下り居る 重五
 二の尾に近衛の花のさかりきく 野水
 蝶はむくらにとばかり鼻かむ 芭蕉
 のり物に簾透顔おほろある 重五
 いまそ恨の矢とはなつ聲 荷兮
 むす人の記念の松の吹おれて 芭蕉
 とはし宗祇の名をつけし水 杜國

笠ぬきて無理にもぬるゝ北時雨 荷兮
 冬かれは氣てひとり唐萱 野水
 しらくと碎けしと人の骨か何 杜國
 鳥賊は多ひすの國のうらかね 重五
 おはれさの體にもとけし郭公 野水
 秋水一斗もりつくす夜ろ 芭蕉
 日東の李白か坊に月を見て 重五
 巾に木槿をはさむ琵琶打 荷兮
 うしの跡とふうふ草の夕くれに 芭蕉
 箕に鮫の魚をいとしき 杜國
 わかいのりあきかたの星孕むへく 荷兮
 氣ふすいもとのまゆかきゆき 野水

綾ひこへ居湯に志賀の花漉て 杜國
廊下は藤のかけつとふや 重五

おもへとも壯年

いまたころもを振はす

はつ雪のこととも袴きてかへる 野水

霜にまた見た見る 薺の食 杜國

野菊までたつぬる蝶の羽おれて 芭蕉

うつしき氣れとくるあひきけり 荷兮

麻呂か月袖に鞆鼓をならすらん 重五

桃花をたをる 貞徳の富 正平

雨こゆる淺香の田螺ほりうへて 杜國

奥のきさらきを只ききにさく 野水

床ふけて語れはいどこある男 荷兮

縁さまたけの恨みのこりし はせを

口おしと瘤をちきるちからさき 野水

明日はかたきにくひ送りせん 重五

小三太に盃とらせひどつうたひ 芭蕉

月は遅かれ牡丹ぬす人 杜國

繩あみのかしりばやぶれ壁落て 重五

こつ く どのみ地藏切町 荷兮

初はなの世とてや嫁のいかめしく 杜國

かぶろいくらの春うかはゆき 野水

櫛はこに餅すゆる絲やほのかある 可氣以

うくいず起は紙燭とほして 芭蕉
 篠ふかく稍は柿の帯さひし 野水
 三線からん不破のせき人 重五
 道すがら美濃て打氣る基を忘る 芭蕉
 糸さめく のさても七十 杜國
 奉加めず御堂に金うちにあい 重五
 ひとつの傘の下舉りさす 荷兮
 蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮 杜國
 まどに手つから薄様をすき 野水
 月にたてる唐輪の髪赤枯て 荷兮
 戀せぬさぬた臨濟をまつ はせを
 秋蟬の虚に聲きくしつかさば 野水

藤の實つたふ雪ほつちり 重五
 袂より硯をひらき山かけに 芭蕉
 飛どり八典侍の局か内侍か 杜國
 三ヶの花鸚鵡尾あかの鳥いくさ 重五
 しらがみいさむ越の獨活刈 荷兮
 つえをひく事僅に十歩
 づしみかねて月とりをどす霽かな 杜國
 こほりふみ行水のいなつま 重五
 齒朶の葉を初狩人の矢に負て 野水
 北の御門さおもあけ此はる 芭蕉
 馬糞搔あふさに風の打かすみ 荷兮

茶の湯者おしむ野への蒲公英 正平
 らうたけに物よむ娘かしのきて 重五
 燈籠ふたけにあさけくらふる 杜國
 つゆ萩のすまふ力を撰はれす 芭蕉
 蕎麥さへ青し滋賀樂の坊 野水
 朝月夜双六うちの旅寐して 杜國
 紅花買みちにはとほきずさく 荷分
 しのふまのわさどて雛を作り居る 野水
 命婦の奥より米あんどこす 重五
 まかきまて津浪の水にくつれ行 荷分
 佛喰たる魚解さけり 芭蕉
 懸ふるはな見次郎と仰かれて 重五

五 形 董 には 畠 六 反 とこく

うれしげに囀る雲雀ちりくと 芭蕉
 眞晝の馬のねふたかほや 野水
 れかさきや矢矧の橋のなかき哉 杜國
 庄屋の松をよみて送りぬ 荷分
 捨し子は柴苜長にのひつらん 野水
 晦日とさむく刀賣る年 重五
 雪の狂吳の國の笠めつらこき 荷分
 襟に高雄か片袖としく ばせを
 あた人と樽を棺に吞本さん 重五
 芥子のひとへに名をとほす禪 杜國
 三ヶ月の東は暗く鐘の聲 芭蕉

秋湖かすかに琴かへす者 野水
 烹藥事とゆるしてはせを放ける 杜國
 聲よき念佛數をゑだつる 荷兮
 かけうすき行燈けしに起倦て 野水
 おもひかねつも夜るの帯引 重五
 ことがれ飛たましぬ花のかけに入 荷兮
 しの望の日を我もおあじく はせを

なに波津うあし火焼家にてすしけたれと
 炭賣のそのかつまこそ黒からめ 重五
 ひとの粧飛き鏡磨寒 荷兮
 花蘇馬骨の霜に咲かへり 杜國

鶴見るまどの月かすかなり 野水
 か勢吹ぬ秋の日瓶に酒なきし 芭蕉
 萩織るかさを市に振する 羽笠
 賀茂川や胡磨千代祭り微近シ 荷兮
 いはくらの聳なつかしの比 重五
 おもふこと布搗哥にはらはれて 野水
 うさそはたちを越るまゐるかほ 杜國
 捨られてくねるか鴛の離れ鳥 羽笠
 火をかぬ火燧なき人と見舞 芭蕉
 門守の翁に紙子かりて寐る 重五
 血刀かくす月の暗きに 荷兮
 霧下にて本郷の鐘七ツたたく 杜國

ふゆまつ納豆たくとなるべし 野水
 はなに泣園の燭とすてにける 芭蕉
 僧ものいはす歎冬を吞 羽笠
 白燕濁らぬ水に羽を洗ひ 荷分
 宜旨かとしこく釵を鑄る 重五
 八十年を三つ見る童母もちて 野水
 なかたちうむる七夕のつま 杜國
 西南に桂のはなつほむとき 羽笠
 蘭のあふらにノ木うつ音 はせを
 賤の家に賢ある女見てかへる 重五
 釣瓶に粟をあらふ日のくれ 荷分
 はやり來て撫子かさる正月に 杜國

田家眺望

つゝみ向る辨慶の宮 野水
 寅の日の刃を鍛治の急起て 芭蕉
 雲からはしき南京の地 羽笠
 いがさして誰ともしらぬ人の像 荷分
 泥にこゝろのきよき芹の根 重五
 粥すゝるあかつき花にかしこまり やすい
 狩衣の下に鎧ふ春風 芭蕉
 北のかたながめく簾おしやりて 羽笠
 ねしれぬ夢を賣るむし雨 杜國
 霜や鷄のすはあらひにて 荷分
 冬の朝日のあはれなりは梨 芭蕉
 檜檜山家の体を木の葉降 重五

ひ幾ずるうしの塔こもれッ、
 音もあさ具足に月のうすくと
 酌とる童蘭切にいく
 秋のしろ旅の御連歌いどかりに
 彫はれて富士みゆる寺
 舞として椿の花の落る音
 茶に糸遊おるむる風の香
 雉追に烏帽子の女五三十
 庭そ木曾作るうひの薄衣
 なつふかき山橘かさくら見ん
 麻うりといふ歌の集あむ
 江を近く撥樂菴と世を捨て

杜 國
 羽 笠
 野 水
 芭 蕉
 荷 兮
 杜 國
 重 五
 野 水
 羽 笠
 野 水
 重 五
 芭 蕉
 重 五

我月出よ身はお本ろなる
 堂ひ衣笛に落花を打拂
 籠輿ゆるす木瓜の山あい
 骨を見て坐に泊くみうちかへり
 乞食の装をもらふしのゝめ
 酒のうへに尾を引鯉を拾ひ得て
 御幸に進む水のみくすり
 とにてる年此小角聲の花もろし
 萱屋まはらに炭團つく白
 芥子おまの小坊交りに春むれて
 ある、はすのみ豊てる蓮の實
 しつかさに飯臺のうく月の前

杜 國
 羽 笠
 野 水
 芭 蕉
 荷 兮
 杜 國
 重 五
 野 水
 羽 笠
 野 水
 重 五
 芭 蕉
 重 五

露をくきつね風やかきしき 杜國
 釣柿に屋根ふかれたる片庇 羽笠
 豆腐つくりて母の袁に入 野水
 元政の草の秩も破ぬへし 芭蕉
 伏見木幡の鎧はなをうつ か氣ぬ
 いろふかき男猫ひとつを捨のねて 杜國
 春のしらすの雪はきをよふ 重五
 水子を秀句の聖わかやかに 野水
 山茶花匂ふ春のこからし うはつ
 いきに見よと難面うしをうつ霰羽 ○ 樽
 火にあぶるかれはかの松 荷分
 どくさ菊下着に髪をちやせんして 重五

檜木に宮を屋の壽朝霞 杜國
 銀に恰かはん月豊海 芭蕉
 ひたりに橋をすかす岐阜山 野水

◎ひさこ

江南の珍碩我はひさこを送れりこれは
 是水漿をもち酒をたしなむ器にもあら
 す或は大樽に造りて江湖をわたれとい
 へるふくへにも異なり吾また後の惠子
 にして用るとをしらすつら／＼のほ
 どりに睡りあやまりて此うち陥る醒
 てみるに日月陽秋きらくかにして雪の

あけはの闇の郭公もかけたることなく
きを吾知人とも見えきたりて皆風雅の
薬思をいへりしらす是れはいつれのと
ころにして乾坤の外あるとを出てうの
ことを云て毎日此内にをとり入

元禄三六月

越智

越人

花見

木もとに汁も鱈も櫻かな 翁
西日のとかによき天氣なり 珍 碩
旅人の風かき行春暮て 曲 水
はきも習はぬ太刀の鞘 翁
月待て假の内裏の司召 碩

粉白のつくる袖かはやわざ 水
鞍置る三歳駒に秋の來て 翁
名いさましくに降替る雨 碩
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮 水
中にも勢いの高き山伏 翁
いふ事を唯一方を落としけり 碩
ほそき筋より戀つものりつゝ 水
物思ふ身にも喰へどせつかれて 翁
月見る顔の袖おもき露 碩
秋風の船をこはかる波の音 水
雁 ゆくかたや白子若松 翁
千部讀花の盛の一身田 碩

巡禮死ぬる道のかげくふ 水
 何よりも蝶のうつしうあはれなる 翁
 文書ほどの力さへなき 碩
 羅に日をいとはるゝ御かたち 水
 熊野見たきと泣玉ひけり 翁
 手束弓紀の關守か頭に 碩
 酒では多たるあたまた成らん 水
 双六の目をのろくまで暮かゝり 翁
 假の持佛にむかう念佛 碩
 中く土間に居れば蚤もなし 水
 我名は里のなふりものなり 翁
 憎れでいらぬ躍の肝を煎 碩

月夜く明渡る月 水
 花薄あまりまねけはうら枯て 翁
 唯四方なる草菴の露 碩
 一貫の錢むつかしと返しけり 水
 醫者のくすりは飲ぬ分別 翁
 花咲の芳野あたりを欠廻 水
 虬にさしるゝ春の山中 碩
 いろくの名もまきはしき春の艸 珍碩
 うたれて蝶の目を覺しぬる 翁
 蝙蝠ののどかにつらさをし出て 路通
 駕籠のとほらぬ峠越たり 全
 紫蘇の寶をかますに入るゝ夕暮 碩

親子ならひて月に物くふ 全
 秋の色宮ものろかせ給ひけり 通
 ころくられては笑ふ係 全
 うつり香の羽織を首にひきまきて 碩
 小六うたひし市かへのるさ 全
 鯉釣のちいさく見ゆる川の端 通
 念佛申ておかむみつかさ 全
 こしらえし薬もうれす年の暮 碩
 庄野の里の犬をとされ 全
 旅姿稚き人の嬭つれて 通
 花とあかいよ月は臙夜 全
 とほのさす縁の下まで和日なり 碩

生鯛あかる浦の春かな 全
 此村の廣きに醫者のあかりけり 荷
 ろろはんをけはものしりといふ 越 人
 かはらざる世を返屈もせずに通 兮
 また泣出たす酒のさめきは 人
 なかめやる秋の夕うたゝひろき 兮
 蕎麥真白に山の胴中 人
 うどんうつ里のはつれの月の影 兮
 すもゝもつ子のみな裸むし 人
 めつらしやまゆ煮しと立どまり 兮
 文珠の智慧も槃特か愚痴 人
 なれか滅又とは出来しひも味憎 兮

向ともせぬに落る釣棚 人
 のふ夜のおかしうありて笑出ヌ 兮
 逢ふより顔を見ぬ別して 全
 汗の香をかゝゑて衣をとり残し 人
 しきりに雨はうちあけてふる 全
 花さかり又百人の膳立に 兮
 春の旅とも松もはさる旅 全
 鐵炮の遠音に曇る卯月哉 野 經
 砂の小麥の瘦てはら〜 里 東
 西風にますほの小具拾はせて 泥 土
 さまぬる一ツ餉ひかねたり 乙 州
 碁いさかひ二人しらける有明に 怒 誰

城下

秋の夜番の物もうの聲 珍 碩
 女郎花心細氣におそはれて 筆
 目の中ねもく見せかちなる 野 經
 けふも又川原咄しをよく覺へ 里 東
 顔のおのしき生つきなり 泥 土
 馬に召神主殿をうらやみて 乙 州
 一里こツそり山の 下刈 怒 誰
 見知られて岩屋に足も留られず 泥 土
 ろれ世は泪雨としくれど 里 東
 雪舟に乗越の遊女の寒さうに 野 經
 壹歩よつなぐ丁百の錢 乙 州
 月花に庄屋をよつて高ふらせ 珍 碩

煮しめの盃のからき早蕨 怒誰
 くる春に付ても都わすられず 里東
 半氣違の坊主泣出す 珍碩
 のみに行居酒の荒の裸 乙州
 古きはくろののこる鎌倉 野徑
 時くは百姓までも烏帽子にて 怒誰
 配所を見廻ふ供御の蛤 泥土
 たそかれは船幽霊の泣やらん 珍碩
 逆る力も皆座頭あり 里東
 から風の大岡寺細手吹透し 野徑
 蟲のこはるに用叶へたき 乙州
 糊剛き夜着にちいさき御座敷で 泥土

雜

夕邊の月に菜食嗅出す 怒誰
 看經の嗽にまきる、咳氣聲 里東
 四十は老のうつくしき際 珍碩
 髪くせに枕の跡を寢直して 乙州
 酔を細目にあけて吹る、 野徑
 杉村の花は苦葉に雨氣つき 怒誰
 田の片隅に苗のとりさし 泥土
 龜の甲煮らるゝ時は鳴もせず 乙州
 唯牛糞に風のふく音 珍碩
 百姓の木綿仕まへは冬のきて 里東
 小歌そろゆるからうすの繩 探志
 獨寢て奥の闇ひろき旅の月 昌房

蠅螂落ちてきゆる行燈 正秀
 秋萩の御前にちかき坊主集 及扇
 風呂の加減のしつかりかけり 野經
 鶯の寒き聲にて鳴出し 二嘯
 雪のやうなるかますこの塵 乙州
 初花に雛の卷樽居からべ 珍碩
 心のそこに戀ぞありける 里東
 御す簾の香に吹きうなこへし笛の役 探志
 寐とに起て聞は鳥啼 昌房
 錢入巾着下て月に行 正秀
 また上京も見ゆるや、さむ 及扇
 蓋に盛鳥羽の町屋の今年米 野經

雀を荷ふ籠のぢよめき 二嘯
 うす曇る日はとんみりと霜をれて 乙州
 鉢いひならふ聲の出かねる 珍碩
 染てうき木綿袷のぬすみ色 里東
 撰あまされて寒きわけばの 探志
 暗がり薬鐘の下をもへし付 昌房
 轉馬を呼る我まわり口 正秀
 いきりたる鍵一筋に狭箱 及扇
 水汲かゆる鯉棚の秋 野經
 さわくと切籠の紙手に風吹て 二嘯
 奉加の亭にもほのか成月 乙州
 喰物に味のつくこそ嬉しけれ 珍碩

煤掃うちば次に居替る 里東
 目をぬらに禿のうそにとりあけて 探志
 こひにははかたき最上侍 昌房
 手みじかに手拭ねちて腰にさげ 正秀
 繩を集る寺の上茨 及肩
 花の比晝の日待に節だ着て 野經
 さいらに狂ふ獅子の春風 二嘯
 疇道や苗代時の角大師 正秀
 明れば霞む野鼠の顔 珍碩
 齧ふとのわやくに鳴の春の空 全
 かまへをかしき門口の文字 秀
 月影に利休の家を鼻に懸 全

田野

度々辛をもらはるなり 碩
 虫は皆つゝれくと鳴やらん 秀
 片足ぐの木履たつぬる 碩
 誓文を百もたてたる別路に 秀
 なみたくみけり供の侍 碩
 須摩はまゝ物不自由ある壘所 秀
 狐の恐る弓かりにやる 碩
 月氷る師走の空の銀河 秀
 無理に居たる膳も進まず 碩
 いらぬとて大脇指も打くれて 秀
 獨ある子も矮鶏に替ける 碩
 江戸酒を花さく度に戀しけり 秀

あいの山彈春の入相 全
 雲雀啼里は既糞かき散じ 碩
 火を吹て居る禪門の祖父 秀
 本堂はまた荒壁のはしら組 碩
 羅綾袂しぼり給ひぬ 秀
 齒を痛む人の姿を繪に書て 碩
 薄雪たはむすゝき瘡たり 秀
 藤垣の窓に紙燭を挾をき 碩
 口上果ぬいかさまの時宜 秀
 たふとげに小判よそふる革袴 碩
 秋入初る肥後の隈本 秀
 畿日路も管て月見る役者船 碩

寸布子ひとつ夜寒やけり 秀
 澤山は冗めくど叱られて 碩
 呼ありけとも猫は歸らす 秀
 子規御小人町の雨あがり 碩
 やしほの楓木の芽萌立 秀
 散花に雪踏挽つる音ありて 碩
 北野の馬場にもゆるりけるふ 秀

猿蓑

晋其角序

詠諧の集つくる事古今にむたりて此道
 のおもて起べき時なれや幻術の第一と

してその句に魂の入ざればゆめにゆめ
とるに似たるべし久しく世にとまり
長く人にうつりて不變の變をしらむ
五徳はいふに及はず心をこらすべきた
しきみなり彼西行上人の骨にて人を作
りたる聲いわれたる笛を吹やうにきん
侍ると申されける人には成て侍れども
五の聲のわかれざるは反魂の法のおろ
そかに侍にやされはたましいの入たら
はアイウエナよくひゝきていかならん
吟聲も出ぬべし只俳諧に魂の入たらむ
にこそとて我翁行脚のうる伊賀越しけ

る山中にて猿に小蓑を着せて俳諧の神
を入れたまひければたちまち斷腸か思
叫ひけむあたに懼るへき幻術なりこれ
を元として此集をつくりたて猿みのだ
は名付申されける是が序もりの心をと
り魂を合せて去來凡兆のほしけきるに
まかせて書

冬

初しくれ猿も小蓑をほしけ也 芭蕉
われ聞けと時雨來る夜の鐘の聲 其角
時雨きや並ひかねたる鮎ふね 千那
幾人かしくれかけぬく勢田の橋 丈艸

伊賀の境
に入て

鎗持の猶振たつるしくれ哉	正秀
廣澤やひとり時雨る、沼太郎	史邦
舟人にぬりれて乗し時雨かな	尙白
なつかしや奈良の隣の一時雨	曾良
時雨る、や黒木つむ屋窓あかり	凡兆
馬がりて竹田の里や行しくれ	乙州
たまされし星の光や小夜しくれ	羽江
新田に稗穀焼るしくれう邪	昌房
いそかしや沖の時雨の真帆片帆	去來
はつ霜に行や北斗の星の前	百歳
いろいろも動く物なき霜夜哉	野水
はつしもに何とれよるう舟の中	其角

淀にて

ならにて

歸花それにもしかん楚切れ	同
禪寺の松の落葉や神無月	凡兆
百舌鳥のゐる野中の杭よ十月	嵐蘭
こがらしや頬腫病む人の顔	芭蕉
砂よけや蟹のかたへの冬木立	凡兆
棹鹿のかさなり臥る枯野かき	土芳
澁柿をかがめて通る十夜哉	裾道
ちやの花やほる、人なき靈聖女	越人
みのむしの茶の花もへに折ける	猿雖
古寺の箕子も青し冬かまへ	凡兆
翁の野田に閑居を聞て	
雑水のなところならば冬ともり	其角

草津

霜月朔旦

この寒さ牡丹のはさのまつ裸 車來
 晦日も過行うはかいのと哉 尙白
 神迎・水口 たちか馬の鈴 珍碩
 膳まはり外に物さし赤柏 良品
 水無月の氷を種にや水仙花 不玉
 今は世をたのむけしきや冬の蜂 且蕪
 尾頭のこゝろもとさき海鼠哉 去來
 一夜くさむき姿や釣干菜 探九
 みちはとに多賀の鳥井の寒さ哉 尙白
 茶湯とてつめたき日にも稽古哉 龜翁
 炭竈に手負の猪の倒れけり 凡兆
 住つかぬ旅のこゝろや置火燧 芭蕉

貧交

寝こゝろやこたつ蒲團のさめぬ内 其角
 門前の小家もあそふ冬至哉 凡兆
 木兎やおもひ切たる晝の面 芥境
 みつづくは眠る所をさゝれけり 半殘
 ましはりは紙子の切を譲りけり 丈艸
 浦風や巴をくつつすむら千鳥 良曾
 あら磯やはしり馴たる友千鳥 去來
 狼の跡踏消すや濱千鳥 史邦
 背門口の入江にのほる千鳥哉 丈艸
 いつ迄か雪にまふれて鳴千鳥 千那
 矢田の野や浦のなくれに鳴千鳥 凡兆
 笹士の見かへる跡や駕の中 木節

水底を見て来た貌の小鳴かき 丈艸
 鳥共も寝入てゐるか余吾の海 路通
 死まて操るらきん鷹のかほ 且葉
 襟巻に首引入て冬の月 杉風
 この木戸や鎖のさゝれて冬の月 其角
 からしりの蒲團はかりや冬の旅 暮年
 見やるさる旅人さむし石部山 智月
 翁行脚のふるか衾をあたへらる記あり略之
 首出してはつ雪見はや此衾 竹戸
 題竹戸之衾
 疊めは我手のあとを紙衾 曾良
 魚のかけ轉のやるせなき氷哉 探丸

しりかさと數珠もどはす綱代守 艸丈
 御白砂に候す

藤つきにかしこまり居る霞か那 史邦
 椽欄の葉の霞に狂ふあらし哉 野童
 鶉の橋よりこほすあられ哉 禾峰
 呼かへす鮒賣見えぬ霞か哉 凡兆
 みぞれ降る音や朝飯の出来る迄 畫好
 はつ雪や内に居さうな人は誰 其角
 初雪に鷹へやのぞく朝朝 吏邦
 霜やけの手を吹てやる雪まろけ 羽江
 わさも子か爪紅紛のこす雪まろけ 探丸
 下京や雪つむ上の夜の雨 凡兆

なかくと川一筋や雪の原 同

信濃路を通るに 雪ちるや穗屋の薄入刈残し 芭蕉

草菴の留主をとひて

衰老は簾もあけす菴の雪 其角

雪の日は竹の子笠よりまさりける 羽笠

誰とても健かならは雪のたひ 郊七

ひつかけて行や雪吹のてまじことさ 去來

乳のみ子に世を渡したる師走哉 尙白

かゝ鮭も空やの疲も寒の内 芭蕉

鉢たゝき憐は顔に似ぬものか 乙州

一月は家に米かせはちたゝき 丈草

夜神樂や鼻息白し面の内 其角

節季候に又のぞむへき事もあし 順琢

家くやかたちいやしきすと拂 祐甫

乙州か新宅にて

人に家をかかせて家は年忘 芭蕉

弱法師家門ゆるせ餅の札 其角

歳の夜や曾祖父を聞けば小手枕 長和

らす壁の一重は何かとしの宿 去來

くれて行年のまうやけ伊勢くまの 同

大としや手のをかれたる人こゝろ 羽江

やりくれて又やさむしろ歳の暮 其角

いねくど人にもはれつ年の暮 路通

住吉奉納

青亞追悼

夏

年のくれ破ればかまの幾くたり 杉風
 有明の面おこすやほととぎす 其角
 夏かすみ曇り行衛や時鳥 木節
 野を横に馬引むけよほととぎす 芭蕉
 時鳥けふにかきりて誰もさし 尙白
 ほととぎす何にもさき野ノ門構 凡兆
 ひるまてはさのみいろかす時鳥 智月
 蜀魂さくや木の間の角櫓 史那
 入相のめしきの中やほととぎす 羽江
 ほととぎす灘よりかみのわたり哉 丈草
 心なき代官殿やほととぎす 去來
 こい死せ我塚とたけほととぎす 奥州

松島一見の時千鳥もかるや鶴の毛衣と

よめりければ

松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良
 うき我をさしひとからせよかんと鳥 芭蕉
 旅館庭せまく庭草を見す

若楓茶いろに成も一さかり 曲水

四月八日詣慈母墓

花水たうつしかへたる茂りか那 其角
 葉かくれぬ花を牡丹の姿か那 全峯
 ちるとききの心やすさよ米露花 越人
 智慧のある人には見せしげしの花 珍碩
 翁に供られてすまみかしのわたりて

別僧

似合しきけしの一重や須磨の里 杜園

青くさき匂もゆかしけしの花 嵐蘭

井のすえに淺く清し杜若 半殘

起き出て物にまぎれぬ朝の間の 仙化

起く心の心うとかすかきつはた

題去來之嵯峨落柿舍豆 二句

豆植る畑も木べ屋も名所哉 凡兆

破垣やわさと鹿子のかよび道 曾良

誰のろくならの都の園の桐 千邦

洗濯やきぬにもみ込柿の花 薄芝

竹の子の力を誰にたどふへき 凡兆

たけの子や畠隣に悪太郎 去來

南都旅店

豊國にて

明石夜泊

たけの子や稚き時の繪のすさび 芭蕉
猪又吹かへさるゝともしかな 正秀
蜻蛉やはかみき夢を夏の月 芭蕉
君が代や築摩祭も鍋一ツ 越人
五月三日りたましせる家にて

屋ね葺と並てふける菖蒲哉 其角
粽結ふかた手にはさむ額髪 芭蕉
隅篠の廣葉うるはし餅粽 岩翁
さひしさに客人やとふまつり哉 尙白
五月六日大坂うち死の遠息を吊ひて
大坂や見ぬよの夏の五十年 蟬吟
夏草や兵共かゆめの後 芭蕉

奥州高館
てに

這出にかひ屋か下の蟾の聲 同

此境はひわたるはどいへるもこの事にや

かたつふり角ふりいけよ須摩明石 同

五月雨に家ふり捨てあめくしり 凡 兆

ひね麥の味なき空や五月雨 木 節

馬士の謂次第なりさつきあめ 史 邦

奥州名取の郡に入て中將實方の

塚はいづくにやと尋侍れば道

より一里半はかり左りの方笠嶋

といふ處に有とあしゆふりつ

きたる五月雨いどわりなく打過

るに

笠嶋やいつこ五月のぬかり道 芭 蕉

大和紀伊のさかひはてなし坂に

て往來の順禮をどしめて奉加す

しめければ料足つしみたる紙の

はしに書つけ侍る

つくりもはてなし坂や五月雨 去 來

髪剃や一夜に全晴て五月雨 凡 兆

日の道や焚傾くさ月あめ 芭 蕉

縫物や着もせてよこす五月雨 羽 江

七十餘考醫みまかりけるに弟子

のころりてあくまゝ予にいたみ

の句をけるうの老醫いまろかりし

時もさらに見しれる人にあらず
りければ哀にもあるひよらずし
て古來まれなる年にこそといへ
どとかくゆるぎとりければ

六尺も力落しや五月あめ 其角

百姓も麥に取つく茶摘歌 去來

しがらきや茶山しに行夫婦つれ 正秀

つがと合子供のたけや麥畠 遊力

麥藪の家してやらん雨蛙 智月

麥田來て鯉迄喰ふ山家哉 花紅

さら川の關越來て 芭蕉

風流のはじめや奥の田植歌 芭蕉

孫を愛して

出羽の最上を過て

眉婦を面影りして紅紛の花 同

法隆寺開帳南無佛の太子を拜す

御袴のはつれなつかし紅粉の花 千邦

田の畝の豆つたひ行螢かき 万平

膳所曲水之樓にて

螢火や吹とはされて鴉のやみ 去來

やみの夜や子供泣出す螢舟 几兆

やたる見や船頭酔てたほつかき 芭蕉

三熊野へ詣ける時

螢火やこゝちそろしき入鬼尾谷 里尼

あながちに鶉とせりあはぬかもめ哉 尙白

勢田螢見

病後

草むらや百合は中くはなの貌 半殘
空つりやかしらふらつく百合の花 何處
す、風や我より先に百合の花 乙州
燒蚊辭を作りて

餞別

子やなかん其子の母も蚊の喰シ 嵐關
立さまや蚊屋もはづさぬ旅の宿 里東
うとくなる人につれて
參宮する從者にはあむけして
みじか夜を吉次が冠者に名殘かな 其角
隙明や蚤の出で行耳の穴 丈草
下闇や地虫ながらの蟬の聲 嵐雪
客ふりや居處かゆる蟬の聲 探志

頓で死ぬ氣しきは見えす蟬の聲 芭蕉

衷さや青麻刈る露のたま 槐市
渡り懸て蕨の花の浮く流かな 凡兆
舟引の妻の唱歌か合歡の花 千邦
白雨や鐘すしはづす日の夕 史邦

素堂之蓮池邊

白雨や蓮一枚の捨あたま 嵐關
日焼田や時くつらくきく蛙 乙州
日の暑き鹽の底の蟻かな 凡兆
水無月も鼻つきあはす數寄屋哉 同
日の岡やこがれて暑さ牛の舌 正秀
たゝあつと籬によきは髪露 木節

しねんこの藪ふく風うあつかりし 野童
 夕かほによはれてつらき暑さかな 羽江
 春草は湯入なかめんあつさかな 巴山
 千子が身まりけるをき、てみの、國
 より去來がもとへ申遣し侍りける
 無き人の小袖も今や土用干 芭蕉
 水無月や朝めしくはぬ夕す、み 嵐蘭
 したらくにぬれば涼しき夕へかな 宗次
 すゝしきや朝草門に荷ひ込 凡兆
 唇に墨つく見れす、みかな 千邦
 月鉾や兒の額此薄粧 曾良
 夕くれや帆並びたる雲の峰 去來

秋

はじめて浴に入て
 雲の峰今のは比叡に似た物か 元道
 秋風や蓮をちからに花一つ 讀人
 此句東武よりきこゆもし素堂か
 かつくりとぬけ初る齒や秋の風 杉風
 芭蕉葉は何になれとや秋の風 路通
 人に似て猿も手を組秋のかぜ 珍碩
 加賀の全昌寺に宿す
 終夜秋風さくや裏の山 曾良
 蘆原や鷺の寐ぬ夜を秋の風 山川
 あさ露や鱗金島の秋の風 凡兆
 はつ露や猪の臥芝の起あがり 去來

大比叡やはこふ野菜の露とけし 野 童
 三葉ちりて跡はがれ木や桐の苗 凡 兆
 文月や六日も常の夜には似ず 芭 蕉
 合歡の木の葉こしひいとへ星のかけ 全
 七夕やあまよりいそがはころふへし 杜 若
 みやこにも住よしりけ相撲取 去 來
 朝かほは露眠る間のさかりかな 風 麥
 薺やぬかここの蔓のほとかれず 及 肩
 笑にも泣にもにさる木槿かき 嵐 蘭
 手を掛てちらて過行木槿哉 杉 風
 高燈籠ひるは物うさ柱の 手 那
 はてもきて瀬のなる音や秋霰雨 史 邦

そよ／＼や敷の内より初あらし 且 藁
 秋風やとても薄はうこくはす 子 尹
 迷ひ子の親このへるやくすき原 羽 江
 八瀬おはらに遊吟して柴うりの文書
 ける序手に
 まぬき／＼柄の先の薄かき 凡 兆
 つくしよりのへりけるにひみどいふ山にて
 卯七に別て
 君かてもましる成へしはき薄 去 來
 草刈よそれか思ひか萩の露 李 由
 元祿二年翁に共せられてみちのく
 より三越路にう／＼り行脚しけるに

かゝへの國にていたへり侍ていせ
まて先達けるとして

いづくにかたふれ臥とも萩の原 曾良

桐の木にうつら鳴なる塀の内 芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原 凡兆

初雁に行燈とるなまくらもと 落梧

病雁の夜さむに落て旅ねかき 芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいと哉 全

加賀の小松と云處多田の神社の寶

物として寶盛か菊かう草のかふと

同じく錦のきれ有遠き事かからま

のあたり憐におほむて

堅田にて

むきさんやな甲の下のきりくす 芭蕉

菜畑や二葉の中の虫の聲 尙白

はたちりや壁に來て鳴夜は月 風麥

いせにまふてける時

葉月や矢橋に渡る人どめん 千子

三ヶ月にふかのわたまをかくとけり 之道

粟稗と目出度なりぬはつ月よ 半殘

月見せん伏見の城の捨郭 去來

翁を茅屋に宿して

おもしろう松笠もへよ薄月夜 土芳

加茂に詣しては涙のかゝる哉と
かの上人のたなこの

やしらの神垣に取つきてよみしとや
月影や拍手もるし藤の上 史 邦
友達の六條にかみそりいたしくとて
まかりけるに

影ほうしたふと見送朝月夜 卓 袋
はせを葉や打かへし行月の影 乙 州
京筑紫去年の月こふ僧中間 丈 艸
吹風の相手や空に月 一 ツ 凡 兆
ふりかねてこよいになりぬ月の雨 尙 白
向のよき宿も月見る契がな 曾 良
元祿二年つるかの港に月を見て
氣比の明神に詣遊行上人の古例をきして

月清し遊行のもてる砂の上 芭 蕉
仲秋の望猶子を葬送して
かゝる夜の月も見よけり野へ送 去 來
明月や所い寺の茶の木原 昌 房
月見れい人の砧まいとかはし 羽 紅
僧正のいもとの小屋の砧かな 尙 白
初汐や鳴門の波の飛脚舟 凡 兆
一戸や衣もやふるし駒むかへ 去 來
稗の穂の馬送したる景色哉 越 人
澁粕や鳥もくはす荒畠 正 秀
あやまりてさしうかさゆる駒哉 嵐 蘭
一鳥不鳴山更幽

物の音ひとり倒るゝかゝし哉 凡兆
 ひつかしき拍子も見えず神かくら 會良
 旅枕鹿のつさ合軒の下 千里
 鳩吹や澁柿はらのそは島 珍碩
 上行と下来る雲や秋の天 凡兆
 鰯釣る頃もあるらし鱸釣 半殘
 田舎間の薄へり寒し菊の宿 待白
 菊を切る跡まはらよも無りけり 其角
 高士手よひわの鳴日や雲ちされ 珍碩
 此頃のおもひるしかな稲の秋 壯芳
 稻刈て母よ出むかふうなひ哉 凡兆

自題落柿舎

柿ぬしや枋いちかさあらし山 去來
 白波やゆづつく橋の下紅葉 塵生
 肌寒し竹切山の薄もみち 凡兆

神田祭

されのこそひなの拍子のあなる哉

神田祭のつしみうの音 蛇足

拍子さへあつまきうとや

花すしき大名衆をまつり哉 嵐雪

行秋の四五目よわるすしき哉 丈草

立出る秋のゆふへや風ほろし 凡兆

世の中ハ鵲鴿の尾の隙もなし 全

鹽魚の齒よはさかふや秋の暮 荷存

春

梅咲て人の怒の悔もあり 露沾

上臍の山莊よまじしくけ

るよ候し奉りて

梅かしくや山路獵入る犬のまね 去來

梅か香や分入る里の牛の角 句空

庭興

梅かしくや砂利敷なかつ谷の奥 土芳

初蝶や骨赤き身よも梅の花 半殘

梅か香や酒の通ひの新しさ 蟬風

梅の木や此一すちを露のたう 其角

子良館の後よ梅ありとい

へい

子良子の一もとゆかし梅の花 芭蕉

瘦藪や雀りたふれの軒の梅 千那

灰捨て白梅くるむ垣ねかな 凡兆

日當りの梅咲うろや屑牛房 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅よなり込ひよき哉 風麥

武江よおもむく旅亭の殘

夢

寝くるしき窓の細目や闇の梅 乙荔

辛未の年彌生のはじめつかたよ

しの山より日とれて梅の匂ひも
 さりなりけれの舊友嵐窓かみぬ
 かたの花や匂ひを案内者といふ
 句を日比の古き事のやうにおも
 ひ侍れども折よふれて感動身よ
 しみわたり泪もおどすばかりな
 れのその夜の夢も正しくまみえ
 て悦るけしきあり亡人いまた風
 雅を忘れさるや
 夢去てまた一句ひ宵の梅
 百八のかねて迷ひや闇の梅
 ひとり寝もよき宿とらん初子日
 嵐 蘭
 其 角
 去 来

野 畠や鴈追のけて摘若菜
 初市や雪よ漕来る若な船
 宵の月西よ蕨の開ゆ也
 憶翁之客中
 裾折て菜を摘まらん草枕
 摘すて踏付かたきわかな哉
 七くさや跡ようがるし朝からす
 我事と鯨の迹し根芹哉
 うすらひやわつかよ咲る芹の花
 朧とい松の黒さよ月夜哉
 鉢たしき来ぬ夜となれハ朧之
 鶯の雪踏おとす垣穂哉
 史 邦
 嵐 雪
 路 通
 其 角
 丈 草
 其 角
 全 来
 去 来
 一 桐

鶯やはや一夢のまたり良 溪石
 鶯や遠路なから禮かへし 其角
 鶯や下駄の齒よつく小田の土 凡兆
 鶯や窓よ炎をすするなから 魚日
 藪の雪柳はかりのすかた哉 探丸
 此瘡の猿の持へき柳がな 下宛
 垣をじよとらへてはなす柳哉 遠氷
 よこた川植所なき柳がな 尙白
 青柳のまなれや鯉の住處 一啖
 雪汗や蛤いかな庭の隅 木白
 待中の正月もはやくたり月 楊水
 田家よ在て

麥のしよやのるし戀か猫の妻 芭蕉
 うちやまじおもひ切る時猫の戀 越人
 うき友よかまれて猫の空なかも 去來
 露沾公まで余寒の當座 去來
 春風よぬきもまたぬ羽織哉 龜翁
 野の梅の散しほ寒さ二月哉 尙白
 出代や櫃よあまれるこさのたけ 龜翁
 出代や幼こしるよ物あひれ 鼠雪
 骨柴のかられなからも木のめ哉 凡兆
 白魚や海苔の下部のかひ合せ 其角
 人の手にとられて後や櫻のり 杉峰
 春雨よたしき出したりつくくし 元志

陽炎や取つぎかぬる雪の上 荷
 かけろふや土もこがさぬあらかこし 百
 陽炎やほろく落る岸の砂 土
 いとゆふのいとあそふ之虚木立 氷
 野馬よ子共あそはす狐かな 凡
 かけろふや柴胡の糸の薄曇 芭
 ひとゆふ顔引のはせ作獨活 配
 狗脊の塵よえらるし藤かな 嵐
 彼岸まへ寒さも一夜二夜哉 路
 箕虫や常のなりよてねはん像 野
 藏並ふうらひ燕のがよひ道 凡
 立さむく今や紀の鷹いせの鷹 澤
 凡 野 路 嵐 配 芭 凡 氷 土 百 荷
 兆 水 通 雪 力 蕉 兆 固 芳 歳 彦

春雨や家根の小草よ花咲ぬ 嵐
 高山よ臥て 湖

はる雨や山よみ出る雲の門 猿
 不性さやかき起されし春の雨 芭
 はる雨や田蓑の鳴の蝸賣 史
 春雨のあかるや軒よ鳴雀 羽
 泥龜や苗代水の畦つたひ 史
 蜂よまゐる木舞の他や虫の糞 昌
 振舞や下座よ直る去年の雛 去
 はる風よこかすな雛の鶺鴒の衆 萩
 桃柳くはりありとやをんたの子 羽
 桃の花境をまらぬ垣根かな 鳥
 鳥 萩 羽 去 昌 史 羽 史 芭 猿 雖

里人の臍おどしたる田よし哉 鼠
 蝶の来て一夜寝よけり窓のきは 半
 紙寫切て白根か獄をゆくへ哉 桃
 いかのほりこしよもすむや濼 固
 日のかげやてもうの上の親うめ 珍
 荷鞍ふむ春の雀や緑の先 土
 闇の夜や巢をまどいして鳴衛 芭
 越より飛驒へ行どて籠の 蕉
 道もあき山路よきまよひ 凡
 鷲の巢の楳の枯枝ま日か天四 兆

芭蕉庵の
 ふるきを
 訪

霞より見えくる雲のかしら哉 石
 子や待んあまき雲雀の高上り 杉
 ひはり鳴中の拍子やきしの聲 芭
 すみれ草小鍋洗ひしあとやこれ 曲
 木瓜萌旅して見たし野のなりぬ 山
 山吹や宇治の焙爐の匂ふ時 芭
 白玉の露よきいつく椿かあ 車
 わか身かよわく病かちありけれ 羽
 春さまをかへて 紅
 舞もくしもしむかしやちり椿 坂
 蝸牛打かふせたる椿かな 上
 鶯の笠かとしたる椿かな 氏
 初さくら又追くよ咲はこそ 利
 雪

東叡山よ
あそふ

葛城のふ
もとを過
る

浪人の宿
よて

道灌山よ
のほる
源氏の繪
を見つて
庚午の年
家を焼
て

小坊主や松よかくれて山さくら
一枝のをらぬもわろじ山櫻
鶏の聲もきこゆる山さくら
真先よみし枝ならんちる櫻
有明のはつくよ咲遅さくら
常齊よはつれてけふの花の鳥
猶見たし花よ明行神の顔
いかの國花垣の庄のそのかみな
らの入重樓の料よ付られけると
いひ傳へられぬ
二里のみな花守の子孫かや
亡父の墓東武谷中よ有しよ三歳
よて別れ廿年の後かの地よ下り
ぬ墓の前よ櫻植置侍るよしかね

九十四

其角
尙白
凡兆
丈章
史邦
千那
芭燕
全

かね母の物語つたへてその櫻を
尋ねけるよ傳への墓猶櫻咲みた
れ侍れぬ
まかしのしや花吸ふ蜂の往還り
知人よあはしくと花見哉
ある僧の嫌ひし花の都哉
鼠とも春の夜あれそ花扱
肝き花最中のゆふへかき
はなも奥ありとかやよしのよ深
く吟し入て

大壘やよしのし奥の花の果
道灌や花のその代を嵐かき
欄干よ夜ちる花の立すかた
焼よけりされども花のちらすまじ
花ちるや伽藍の樞かとし行

園風
去來
凡兆
半殘
長眉
曾良
鼠蘭
羽紅
北枝
凡兆

九十五

大和行脚の時

木曾塚 望湖水惜春

海棠の花の満たり夜の月
草臥て宿かる頃や藤の花
山鳥やつししよけ行尾のひねり
山つしし海又見よとや夕日影
とからして卵の花つほむ彌生哉
鶯の聲聞初てより山路哉
其春の石ともならず木曾の馬
春の夜の誰か初瀬の堂籠り
行春を近江の大とをしえける
鶯の羽も刷ぬはつしくれ
一ふき風の木の葉しつまる
股引の朝からぬるし川こえて
たぬきをふとす篠繩の月
さいら戸は驚這かふる宵の月

九十

普 芭 探 智 山 式 乙 會 芭 去 芭 凡 史 蕉
船 蕉 丸 月 川 之 州 良 蕉 來 蕉 兆 邦

人よもくれす名物の梨
かきなくる墨繪おかじく秋暮て
はさこしるよさめりやすの足袋
何事も無言の内なまつかなり
里見え初て午の具ふく
ほつれたる去年のねこさの滴たるみ
芙蓉のはなのはらくとちる
吸物の先出来されしすいせんし
三里あまりの道かきえける
この春も盧同か男居きりよて
さし木つきたる月の朧夜
苔ながら花よ並ふる手水鉢

來 邦 兆 蕉 來 蕉 邦 兆 來 蕉 兆 邦 來 蕉

ひとり直し今朝の腹たち
いちどさよ二日の物も喰て置
雪けよさむさ島の北かせ
火どもしよ暮れに登る峯の寺
ほととささず皆鳴仕舞たり
瘦骨のまた起直る力なき
隣をかかりて車引こむ
うさ人を枳殻垣よりくらしせん
いまや別の刀さし出さ
せにしけよ櫛（照る）てかきちらし
をもひ切たる死くるひ見よ
青天よ有明月の朝ほらけ

來 邦 兆 來 蕉 兆 邦 蕉 來 邦 兆 來

湖水の秋の比良の初霜

柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ
ぬのこ着習ふ風の夕くれ
押合て寝ての又立つかり梳
たしら雲のまた赤き空
一掃（秋）つくる窓のはな
枇杷の古葉よ木芽もえたつ

蕉 邦 兆 來 蕉 兆 邦 蕉 來 邦 兆 來

市中の物のよほひや夏の月
あつしくと門くの聲
一番艸取りも果さず穂よ出て

凡 芭 去 來 蕉 兆 邦 兆 來

灰うちたしくうるめ一枚
此筋の銀も見えらす不自由さよ
たしどひやうしよ長き脇指
草村よ蛙こひかる夕まくれ
露の芽とりよ行燈ゆりけす
道心のおこりの花のつぼむ時
能登の七尾の冬の住うさ
魚の骨まはふる迄の老を見て
待人入し小御門の鑑
立かすり屏風を倒す女子共
湯殿の竹の簀子倍しき
苗香の實を吹落す夕嵐

來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆

僧やいさむく寺よかへるか
さる引の猿と世を経る秋の月
年よ一度の地子はかるミツタマリ
五六本生木つけたる瀧
足袋ふみよこす黒ほこの道
追たてし早きは馬の刀持
てつちか荷ふ水こほしたり
戸障子もむしろかこひの賣屋敷
てんまやうまもりいつか色つく
こそくと草鞋をつくる月夜さし
蚤をふるひよ起し初秋
そのまよころひ落たる升落

來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆

ゆかみて蓋のあいの半櫃
草菴又暫く居ての打やふり
いのち嬉しき撰集のさた
うさまくは品かひりたる戀をして
浮世の果の皆小町なり
なよ故を弼すしるよも涙くみ
は留主となれの廣き板敷
手のひらよ風這ひする花のかけ
かすみうてかぬ晝のねむたさ

灰汁桶の取やみけりきりくす

凡兆

兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来

あふらかすりて宵寝する秋
新疊敷ならしたる月かけよ
ならへて嬉し十のさかつさ
手代經へき物を櫛く子目して
鶯の音よたひら雪降る
り乗出して眩よ餘る春の駒
摩耶か高根よ雲のかくれ
ゆふめしよかますて喰への風薫
煙の口處をかきて氣味よさ
ものかろひけふの忘れて休む日よ
迎せはしき殿よりのみ
金鏝と人よよはるし身のやすさ

芭蕉 野水 去来 蕉兆 来兆 蕉兆 来兆 蕉兆 来兆 蕉兆 来兆 蕉兆 来兆

あつ風呂すきの宵く月の
町内の秋も更行明やしき
何を見るよも露はかりこ
花どちる身の西念か衣着て
木曾の酢醬よ春もくれつし
かへるやら山陰傳ふ四十から
柴ざす家のむねをからける
冬空のあれよ成たる北下風
旅の馳走よ有明しをく
すさまじき女の智慧もはかなくて
何おもひ草痕のなく
夕月夜岡の萱ねのは廟守る

蕉水來蕉兆來水兆蕉水來兆

人もわすれしあかそふの水
うそつさよ自慢いはせて遊ふらん
又も大事の鮮を取出す
堤より田の青やさていさよき
加茂のやしるい能き社なり
物うりの尻聲高く名乗すて
雨のやどりの無常迅速
晝ねふる青鷺の身のたふとさよ
まよろしく水と蘭のそよくらん
糸櫻腹いつはひよ咲よけり
春の三月曙のそら

水來兆蕉水來蕉兆來水兆

饒乙州東武行

梅若菜まりこの宿のどろし汁
 かさあたらしき春の曙
 雲雀なく小田又土持比なれや
 まどき祝ふて下されまけり
 片隅又虫齒かきえ暮の月
 二階の客いたされたるあき
 放やあうつらの跡の見えもせず
 稻の葉延の力なきかせ
 ほつしんの初よこゆる鈴鹿山
 内藏頭かと呼聲いたれ

素珍乙芭

羽蕉碩男蕉羽男碩州蕉

卯の刻の箕手又並ふ小西方
 すみきる松のまつかえけり
 萩の札すしきの札よみきして
 雀かたよる百舌鳥の一聲
 懐又手をあたしむる秋の月
 汐またまらぬ外の海つら
 鍵の柄又立すかりたる花のくれ
 灰まきちらすからしな跡
 春の日又仕舞てかへる經机
 店屋物くふ俣の手かひり
 汗ぬくひ端のさるしの紺の糸
 わかれせしき雞の下

凡智 去 正 半 土
 羽 羽 羽 羽 羽
 碩 男 蕉 羽 男 碩 州 蕉

大膽又思ひくつれぬ戀をして
 身のぬれ紙の取所さき
 小刀の蛤及なる細工はこ
 棚よ火ともす大年の夜
 こしもどのかもふ便も須戸の浦
 むね打合せ着たるかたきぬ
 此夏もかなめをくする破扇
 醬油ねさせてまはし月見る
 咳聲の隣はちかき縁つたひ
 添へのそふほどこくめんな顔
 形なき繪を習ひたる會津盆
 うす雪かゝる竹の割下駄

猿園 風殘 雖風 雖風 芳殘
 嵐 史 邦 蘭 風 芳 雖 風 殘 雖 風 殘 芳 殘

花よ又ことしのつれも定らす 野水
 離の袂を染まはるかぜ 羽紅

幻住菴記 芭蕉卿

石山の奥岩間のうしろよ山有國分山と云そのかみ
 國分寺の名を傳ふなるへし麓よ細き流れを渡りて
 翠微よ登る事三曲二百歩よして八幡宮たしせ給ふ
 神体ハ彌陀の尊像とかや唯一の家よハ甚忌なる事
 を兩部光を和け利益の塵を同じうまたまふも又貴
 し日比は人の詣さりけれいとく神さひ物まつか
 なる傍よ住すてし草の戸有よもき根笹軒をかこみ
 屋ねより壁落て狐狸ふしとを得たり幻住菴と云あ

るしの僧何かしの勇士菅沼氏曲水予の伯父よあんな
 侍りしを今の八年斗むかしよ成て正よ幻住老人の
 名をのみ残せり予又市中をさる事十年斗よして五
 十年やうちかき身の籠出のみのを失ひ蝸牛家を離
 て奥羽象瀉の暑き日よ面をこかし高すまこわゆみ
 くるしき北海の荒磯よさひすを破りて今歳湖水
 の波よ漂鳩の浮巢の流とよまるへき芦の一もどの
 陰たのもしく軒端茨あらためん垣ね結添なとして
 卯月の初いどかり初よ入し山のやかて出しとさへ
 おもひそみぬさすかよ春の名残も遠からすつし
 咲残り山藤松よ懸て時鳥さばく過る程宿かし鳥
 の便さへ有を木つしきのつしとともしとはしなど

をしろよ興じて魂吳楚東南よはしり身の瀟湘洞庭
 よ立つ山と未申よそはたつ人家よさほどよ隔り南
 薰峯よりおろし北風海を浸して涼し日枝の山比良
 の高根より幸崎の松の霞こめて城有橋有釣たるし
 舟有笠とりよかよふ木樵の聲籠の小田よ早苗をる
 歌盤飛かふ夕闇の空よ水鶏の扣音美景物としてた
 らすと云事なし申よも三上山の土壘の傍よかよひ
 て武藏野の古き栖もおもひいてられ田上山よ古人
 をかそふさしほか嶽千丈か峯袴腰といふ山有黒津
 の里のいとくろう茂りて綱代守るよそとよみけん
 萬葉の姿なりけり猶眺望くまかからむと後の壘よ
 這のほり松の柵作藁の圓座を敷て猿の腰掛と名付

彼海棠よ葉をいとなひ主薄峯よ菴を結へる王翁除
 佗か徒よのあらず唯睡辟山民と成て辱顔よ足をな
 け出し空山よ風を捫て座すたましく心まめなる時
 は谷の清水を汲て自ら炊くどくくの一の單を倍て一
 炉の備へいどかるしはた昔住けん人の殊よ心高く
 住なし侍りてたくみ置る物すまもなし持佛一間を
 隔て夜の物おさむへき處などいさしかまつらへり
 さるを筑紫高良山の僧正は加茂の甲斐何かしか巖
 子よて此たひ浴よのほりいませそかりけるをある人
 をして額を乞いとやすくと筆を染て幻住菴の三
 字を送らる頃て萱菴の記念となしぬすへて山居と
 いひ旅寝と云さる器たぐいのふへくもなし木曾の檜

笠越の菅蓑斗枕の上の柱よ懸たり晝の稀くどよ
 らふ人々よ心を動しあるの宮守の翁里のおのこ共
 入来りていのましの稻くひあらし兔の豆畑よかよ
 ふかと我聞えらぬ農談日既よ山の端よかしれの夜
 坐静よ月を待ての影を伴ひ燈を取ての罔両よ是非
 をこらすかくいへはとてひたふるよ閑寂を好み山
 野よ跡をかくさむとよのあらずや病身人は倦て
 世をいとし人よ似たり情年月の移こし拙き身の
 料をおもふよある時の仕官懸食の地をうらやみ一
 たひの佛籬祖室の扉よ入らむとせしもたよりなき
 風雲よ身をせめ花鳥よ情を勞して暫く生涯のはか
 り事とさへなれの終よ無能無才よして此一筋よつ

なかる樂天の五臟の神をやふり老杜の瘦たり賢愚
交質のひとしからざるもいつれか幻の栖ならずや
とおもひ捨てふしぬ

先たのむ椎の木もあり夏木立

願芭蕉翁國分山幻住菴記之後

何世無隱士以心隱爲賢也何處無山川

風景因人美也間讀芭蕉翁幻住菴記乃

識其賢且知山川得其人而益美矣可謂

人與山川共相得焉題作鄙章一篇歌之

曰

琶湖南分國分嶺 古松辭兮綠陰清

茅屋竹椽纒數間 內有佳人獨養生

滿口錦繡輝山川 風景依稀入誹城

此地自古富勝覽 今日因君尙益榮

元祿庚午仲秋日 震軒具卿

几右日記

時鳥背中見てやる籠かな 曲水

くつさめの跡まつかんたつ山 野水

鶏もはらく時か水鶏なく 去來

海山も五月雨そふやらくらみ 凡兆

軒ちかさ岩梨あるな猿のあし 干那

細脛のやすめ處や夏の山 珍碩

贈紙帳

訪よ留主

おもふ事紙帳よかけと送りけり 野
 いつたさて落の葉よもるおふるよも 里
 螢飛疊の上もこけの露 乙
 夕顔や葎の中の花うつさ 怒
 たとくし峰よ下駄はく五月闇 探
 五羽六羽菴とりまのすかんて鳥 元
 木つしきまわたして明る水鶏哉 泥
 笠あふつ柱すししや風の色 史
 月待や海を尻目よ夕すしみ 正
 まつかさの栗の葉まつむ清水哉 柳
 涼しさやともよ米かむ椎か本 如
 椎の木をたかへて啼や蟬の聲 朴
 水

あり
文よ云こ
す

目の下や手洗ふ程よ海涼し 市
 膳所米や早苗のたけよ夕涼 半
 麥の粉を土産す 殘

書音

一袋これや鳥羽田のことし麥 之
 一夏入る山さのかりや旅ねすき 魯
 夕立や檜木の臭の一まきり 及

昇猿腰掛

秋風や田上山のくほみより 尙
 まら露もまたあらみのく行衛哉 北
 木履ぬく傍よ生けり蓼の花 木
 縋よこす薬袋や萩の露 扇

贈箋

稲の花これを佛の土産哉 智
 石山や行かて果せし秋の風 羽
 紅

包紙よ書

石山や行かて果せし秋の風 羽
 紅

桶の輪やさされ鳴やむさりくす 昌房
里ハいまた夕めし時のあつさ哉 何處
啼やいとく盤よほこりのたまり迄 越人

越人と同しく訪合て

蓮の實の供よ飛入菴かな 等哉

明年彌生尋舊菴

春雨やあらしも果す戸のひつみ 嵐蘭

同夏

涼しさをや此菴をさへ住捨し 曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非比彼

山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感物寫
興而已矣洛下逸人凡兆去來隨翁遊
學棋館竹窓躡等凌節斯有歲屬撰此
集玩弄無已自謂絕超狐腋白裘者也
於是四方陰友憧々往來或千里寄書
今中皆有佳句日蘊月隆各程文章然
有昆仲騷士不集錄者索居窟栖為難
通信且有旄倪婦人不琢磨者麗言細
語為喜同志雖無至其域何棄其人乎
哉果分四序作六卷故不遺廣搜他家
文林也維成元祿四稔辛未仲夏余掛
錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席見需下記

此事一題中書尾上卒援毫不搯拙庶幾一裝
高張有補于詞海漁人云

風狂野裊

艾草漢書

續猿篋

八九間空て雨降る柳かな	芭蕉
春のからすの島ほる聲	沾圃
初荷とる馬子もこのみの羽織きて	馬寛
内いとさつく晩のふるまひ	里圃
きのふから日和かたまる月の色	沾
狗脊かれて肌寒うなる	蕉
澁柿もことしは風又吹れたり	里
孫か跡とる祖父の借錢	寛
脇指又替てはしかる旅刀	蕉
煤をままへのはや餅の段	沾

約束の小鳥一さけ賣よきて 菟
 十里ばかりの余所へ出かゝり 里
 笹の葉よ小路埋ておもしろき 沾
 あたまうつなと門の書つけ 蕉
 いつくへか後の沙汰なき甥坊主 里
 やつと聞出す京の道つれ 菟
 有明よおくるゝ花のたてあひて 蕉
 見事よそろふ粉のはへ口 沾
 春無盡まつ落札か作太夫 菟
 伊勢の下向よへつたりと逢 里
 長持よ小學の仲間そいくと 沾
 くいらとと空の晴る青雲 蕉

禪寺よ一日あそぶ砂の上 里
 槻の角のはてぬ貫穴 菟
 濱出しの牛よ俵をはこぶ也 蕉
 なれぬ嫩よいかくす内證 沾
 月待よ傍輩衆のうちそろひ 菟
 籬の菊の名乗さまく 菟
 ひれて来て栗も榎もむくの聲 沾
 伴僧はしる駕のわさ 蕉
 削やうよ長刀坂の冬の風 里
 まふたよ星のこほれかゝれる 菟
 引立てむとよ舞するたをやがよ 蕉
 をつと火入よおとす薫 沾

花のはや殘らぬ春のたしくれて
瀬がしらのほるかけるふの水
里 菟

雀の字や揃ふて渡る鳥の聲
馬 菟
てり葉の岸のおもしろき月
沾 圃 菟

立家を買てはいれり秋暮て
里 菟
ふつしなるをのそく甘酒
里 菟 圃 圃 菟

霜けたる蕪喰ふ子ども五六人
沾 菟
庭をまいて外の洗足
里 沾 菟

悔しさのけふの一步の見そこなひ
里 沾 菟
請狀すたて奉公ふりする
沾 菟

よすきたる茶前の天氣さつかいし
里 沾 菟
有ふりきたる國方の客
里 沾 菟

何事もなくてめてたき駒迎
沾 菟
風よたすかる早稻の穂の月
里 沾 菟

臺所秋の住居よ住かへて
里 沾 菟
座頭のむすこ女房呼けり
沾 菟

明はつる伊勢の辛洲の年籠り
里 沾 菟
篋のまらみのわかぬ一徳
里 沾 菟

俵米もまめりて重き花盛り
沾 菟
春静なる竿の染纏
里 沾 菟

鶯の道よの雪を掃残し
里 沾 菟
まなぬ合点て煩ふて居る
沾 菟

智恩院の替りの樽極りて 菟
 さくらの後の楓わかやく 沾
 狙の鱸よ水をかけなかし 里
 自利て家いよいよ暮しなり 菟
 状箱を駿河の飛脚請とりて 沾
 また七つよいならぬ日の影 里
 草の葉よくほみの水の澄ちきり 沾
 伊駒氣つかふ綿どりの雨 菟
 うき旅は鴟とつれ立渡り鳥 里
 有明馬よ明はつるそら 沾
 柴舟の花の中よりつくと出て 菟
 柳の傍へ門をたてけり 里

百姓よなりて世間も長閑さよ 菟
 こまめを膳よあらめ片菜 沾
 賣物の澁紙つしみおろし置 里
 はふのあつさはそよりとせぬ 菟
 砂を這ふ棘の中の絡線キスの聲 沾
 別を人かいひ出せば泣 里
 火燧の火いけて勝手をとりませ 菟
 一石よふみし碓の米 沾
 折くは突目の越る天氣相 里
 仰よ加減のちかふ夜寒さ 菟
 月影よことしたのこを吸てみる 沾
 おもひのまよふ早稻て屋根ふく 里

手拂ふ娘をやつて姫のさた 菟
 參宮の衆をこちて仕立る 沽
 花のあと躑躅のかたかおもしろい 里
 寺のひけたる山際の春 菟
 冬よりのすくなうなりし池の鴨 沽
 雨降りてあたらかな風 里
 猿蓑よもれたる霜の松露哉 沽
 日の寒けれと静ある岡 芭
 氷かるし池の中より道ありて 支
 篠竹まじる柴をいたしく 惟
 然

鶏かあかるとやかて暮の月 蕉
 通りのなさは見世たる秋 考
 盆まひ一荷て直さる鮪の魚 然
 晝寐の癖をなをしかねけり 蕉
 聲か来てよつともせすは物語 考
 中國よりの状の吉左右 然
 朔日の日のことへやら振舞れ 蕉
 一重羽織か失てたつぬる 考
 ささんしな青葉の比の檜楓 然
 山よ門ある有明の月 蕉
 初あらし蟲の人のかけまひり 考
 水際光る濱の小鱗 然

見て通る紀三井の花の咲かしり 蕉
 荷持ひとりよいとく永き日 考
 こち風の又西よなり北よあり 然
 わか手よ脈を大事からるゝ 蕉
 後呼の内儀の今度屋敷から 考
 喧嘩のさたもむさとせられぬ 然
 大せつな日か二日有暮の鐘 蕉
 雪かさわけし中のとろ道 考
 来る程の乗掛の皆出家衆 然
 奥の世置の近年の作 蕉
 酒よりも肴のやすき月見して 考
 赤鶏頭を庭の正面 然

定まらぬ娘の心取まづめ 蕉
 寐汗のとまるの今朝かたの夢 考
 鳥籠をつらりとおこす松の風 然
 大工つかひの奥よ聞ゆる 蕉
 米搗もけふのよしとて歸るゑ 考
 から身て市の中を押あふ 蕉
 此あたり彌生の花のけもなくて 然
 鴨の油のまたぬけぬ春 考

野盤子

今宵賦 支 考

今宵の六月十六日のそら水よかよひ月の東方の乱
 山よかよけて衣裳よ湖水の秋をふくむされの今宵

のあそひはしめより、尊卑の席をくばらねど、さ
 く酌てみたらす人ぞこくくは涼みふじて野を思
 ひ山をおもふたましくかたりなせる人さへさらよ
 人を興せしめむとあらねばあなからよ辨のたぐ
 みをもとめず、唯萍の水よまたかひ水の魚をすまし
 むるたどへよそ侍りける、阿叟の深川の草庵よ四年
 の春秋をかさねてごとしのみな月さつきのあひい
 を渡りて伊賀の山中よ父母の古墳をとふらひ浴の
 嵯峨山よ旅ねして加茂祇園の涼みよもたよはす、
 かくてや此山よ秋をまたれけむと思ふよさすか湖
 水の納涼もわすれかたくてきた三四里の暑を凌て
 爰よ草鞋の駕をどしむ、今宵は菅沼氏をあるじとし

て僧あり俗あり俗よして僧よ似たるものあり、その
 交のあひさものの砂川の峯よ小松をひたせるかど
 し深からねすこからすかつ味なうじて人よわか
 るくなし、幾年なつかしかりし人くくのさしむきて
 わするよよたれどおのつからよろこへる宮人
 の顔ようかひておほへす、鶴鳴て月もかたふきける
 や、まじて魂祭る比の、阿叟も古さとの方へと心さし
 中されしを、支考は伊勢の方よ住どころ求て、時雨の
 比はむかへむなともおもふなり、志からは湖の水鳥
 の、やかてはらくよ立わかれていつか此あそひよ
 おなじからし、去年の今宵は夢のとく、明年のいまた
 きたらす、今宵の興宴何をあからさまならん、をい

ろよ酔てねふるものあらひ罰盃の敷よ水をのま
せんとたはふれあひぬ

夏の夜や崩て明し冷し物 芭蕉
露の はらりと蓮の縁先 曲翠
鶯の いらのその程よ音を入れて 臥高
吉さ 草籠よ反故かし込 惟然
月影の雪もちかよる雲の色 支考
まふて 錢を分る 駕かき 芭蕉
猪を 狩場の外へ追よかし 翠
山から石よ名を書て出す 高
飯櫃さる面桶よはさむ火打鎌 然

寫て工夫をなたる 照降 考
おれか事哥よよまるし橋の番 蕉
待佛のかほよ夕日さし込 翠
平畦よ菜を蒔立したはと跡 考
秋風わたる門の居風呂 然
馬引て賑ひ初る月の影 高
尾張てつさしもの名よなる 蕉
餅好のことしの花よあられて 翠
正月ものし襟もよこさす 高
春風よ普請のつもりいたす也 然
藪から村へぬけるうら道 考
喰かねぬ聲も鼻も口さいて 蕉

何ぞの時ハ山伏ヨなる 翠
 笹つとを棒ヨ付たるはさみ箱 高
 蕨ここのはる卯月野の末 蕉
 相宿と跡先ヨたつ矢來の町 考
 際の日和ヨ雪の氣遣 然
 吞こしる手をせぬ酒の引はなし 翠
 着かえの分を舟へあつくる 高
 封付し文箱來たる月の暮 蕉
 そろくありく盆の上薦衆 考
 虫籠つる四條の角の河原町 然
 高瀬をわくする表一固 翠
 今の間は鍵を見かくす橋の上 高

花櫻

春之部

夫キな鐘のとんよ聞ゆる 然
 盛ある花よも扉おしよせて 考
 腰かけつみし藤棚の下 高
 温石のあかるし夜半やはつ櫻 露
 寝時分よ又みむ月かはつ櫻 其
 顔よ似ぬほつ句も出よ初さくら 芭
 ちか道や木の股くする花の山 洞
 角いれし人をかしらや花の友 丈
 花散て竹見る軒のやすさ哉 酒
 堂

梅柳

夕波の船よさこゆるなつな哉 孤屋
 一かぶの牡丹の寒き若菜哉 尾頭
 春もやし氣色としのふ月と梅 芭蕉
 ささらさや大黒棚もむめの花 野水
 守梅のあそひ業なり野老賣 其角
 里坊よ誰さくやむめの花 昌房
 投入や梅の相手の踏のたう 良品
 病僧の庭はれ梅のさかり哉 曾良
 おたらしさ翠簾また寒し梅花 万乎
 薄雪や梅の際まで下駄の跡 魚日
 まら梅やたじかな家もなきあたり 千川
 寝所や梅のよはひをたて籠ん 大丹

田

鳥魚

天神のやしろうよ詣て 遊糸
 身よつげと祈るや梅の籬さの 千那
 むれくの籠のなりや梅柳 意元
 時くの水よかちけり川やなき 季由
 ちか道を教へちからや古柳 コウトウ 九節
 青柳のしたれくられや馬の曲 正秀
 輪を掛けて馬乗通る柳哉 其角
 鶯よ長刀かくる承塵かな 史邦
 うくひすや野の堀越の風呂あかり 智月
 鶯よ手もと休めむなかしもと 芭蕉
 うくひすや柳のうしろ藪のまへ 去來
 瀧壺もひしけと雉のほろし哉

春雨や簀よつしまん雉子の聲 酒堂
 駒鳥の目のさやはつす高根哉 傘下
 こま鳥の音よ似合しき白銀屋 長虹
 燕や田をおりかへず馬のあと 野童
 巢の中や身を細しておや燕 峯嵐
 雀子や姉よもらひし雛の櫃 槐市
 蠅うちまなるく雀の子飼哉 河瓢
 行鴨や東風よつれての磯惜み 釣筥
 芳野西河の瀧 釣筥
 鮎の子の心すよまじ瀧の音 土芳
 かける虫と共よちらつく小鮎哉 圃水
 まら魚の一かたまりや汐たるみ 子珊

白魚のまろき噂もつさぬへし 山蜂
 深川よあろひて 其角
 まら魚をふるひ寄たる四手かな 其角
 春草 正秀
 なくりても萌たつ世話や春の草 正秀
 若艸や松よつけたき蟻の道 此筋
 春の野やいつれの草よかふれけん 羽紅
 川淀や淡をやすむるあしの角 猿雌
 宵の雨まると土筆の長みしか 闇指
 味ひや櫻の花よよめかはき 車來
 茨はら咲そふものも鬼あさみ 荒雀
 提よぐころひ落れぬすみれ哉 馬草

猫戀 胡蝶 白日靜也

踏またれ土堤の切目や露の塔 拙候
ふみたふす形も花され土大根 乃龍
早蕨や笠とり山の柱うり 正秀
みそ部屋のおほひも肥る三ツ哉 夕可
日の影も猫の爪出す獨活芽哉 一桐
蒲公英や葉よのそくのぬ花さかり 圃落
我影や月もなを啼猫の戀 探丸
うさぎ戀もたへてや猫の盜喰 支考
おもひかねその里たける野猫哉 巳百
とまりても翅は動く胡蝶哉 柳梅
衣更着のかさねや寒き蝶の羽 惟然
蝶の舞おつる椿よりたるしな 閣指

春鹿 春耕 桃 椿

風吹も舞の出来たる小蝶哉 重行
晝ねして花もせのしき胡蝶哉 雪窓
振おとし行や廣野の鹿の角 澤雉
妙福のこしるあて有さくら麻 木節
苗札や笠縫をさの宵月夜 此筋
千刈の田をかへすなり難波人 一鷺
白桃やまつくも落す水の色 桃隣
金柑のまた盛あけり桃の花 介花
伏見かど薬種の上の桃の花 雪芝
梅さくら中をたるます桃の花 水鷗
花さそふ桃や歌舞妓の脇躰 其角
江東の季由か祖父の懐舊

の法事よおのく經文題

のほつ句よ彌陀の光明と

といふ事を

小服綿よ光をやとせ玉つばさ

角上

穂の枯て臺よ花咲椿かな

殘香

取あけて見るや椿のほその穴

洞木

ちり椿あまりもろさよ續て見る

野坡

山吹や垣よ干たる篋一重

閨指

田家の人よ對して

山吹も散るか祭の罇あます

酒堂

堀かこすつししの株や蟻のより

雪芝

藪曉や穂麥よとしく藤の花

荊口

款冬

春月

春雨

春雪

蛙

山の端をちから貞之春の月

魯町

物よのき草の座とりや春の雨

荊口

咄さへ調子合けり春の雨

乃龍

春雨や唐丸あかる臺どころ

游刃

なよかし主馬か武江の旅

店を尋ねける時

春雨や枕くつるしうたひ本

支考

はる雨や光りうつろふ鍛冶か槌

桃青

淡雪や雨よ追るしはるの笠

風麥

行つくや蛙の居る石の直

風睡

のほり帆の淡路はなれぬ沙干哉

丟來

品川よ富士の影なき沙干哉

閨指

沙干

雑春

三月盡
歳旦

出かひりやあはれ勤る奉加帳 醉六
 若艸やまたき越たる桐の苗 風睡
 黒はこの松のそたちや若みとり 土芳
 かけるふや巖は腰の掛ちから 配力
 小米花奈良のはつれや鍛冶か家 万季
 聲毎よ獨活や野老や市の中 苔蘇
 木の芽たつ雀かくれやぬけ参 均水
 春の日や茶の木の中の小室節 正秀
 三尺の鯉はぬる見ゆ春の池 仙化
 引鳥の中よ交るや田螺とり 支浪
 臈夜を白酒うりの名殘かな 支考
 若水や手ようつくしき薄氷 武仙

百五十一

庭道ハ年のかすみの立所哉 百歳
 鶯や雜表過ての里つしき 尙白
 蓬萊の具よつかひたし螺の貝 圃箔
 母方の紋めつらじやさそ始 山峰
 詩よいへる衣裳を顛倒す
 といふ事を老父の文よ書
 越し侍れば
 元日や夜ふかき衣のうら表 千川
 人もみぬ春や鏡のうらの梅 芭蕉
 明る夜のほのかよろれしよめか君 其角
 標の世阿彌まつりや青かつら 嵐雪
 萬歳や左右よひらひて松の陰 去來

百五十一

窓よ橋見する羽ふきかな
 土芳
 はつ春やよく仕て過る無調法
 嵐
 冬年孫をまうけて
 元日やまた片なりの梅の花
 猿
 子共よいまつ惣領や藏ひらき
 萬
 背たうかふ物を見せはや花の春
 野
 齒朶の葉よ見よ包尾の鯛のをり
 耕
 雛の寶の寒氣をほとく初日哉
 左
 はつ春や年の若狭の白比丘尼
 前
 枇杷の葉の猶慥之初かすみ
 斜
 世の業や罷りあれども若夷
 山
 濡いろや土があらけの初日影
 任
 行

郭公

元日や置どころなき猫の五器
 竹
 我やといかつらよ鏡すえよけり
 是
 搗栗や餅よやはしれそのむめり
 沾
 虫はしのその日よ似たり藏ひらき
 圃
 夏之部
 曉の雲をさそふやほととぎす
 其
 はととぎす啼や湖水のさら濁
 丈
 去ら濱や何を木かけよほととぎす
 曾
 蜀魄啼ぬ夜白し朝熊山
 支
 鳴瀧の名よやせりあふほととぎす
 如
 童

燕の居なほむ空やほととぎす 芦 鴈
淀より勢田よなげかし子規

此句の石山の麓まで順禮

の吟して通りけるとや

郭公かさいの森や中やどり 沾 圃

橙や日のくもれたる夏木立 閣 指

里くの姿かたりぬ夏木たち 野 萩

此中の古木いつれ柿の花 此 筋

手切の老木も柿の若葉哉 于 川

姫百合や上よりさかる蛛の糸 素 就

まら雲やかさねを渡る百合花 支 考

園中 草花 木

山もえまのかれて咲や杜若 尾 頭

冷汁のひへすまじたり杜若 沾 圃

手のとしく水際うれしかきついた 宇 多 都

夏菊や茄子の花は先へさく 拙 候

夏のせを庵の即興

晝かほや日にくもれども花盛 沾 圃

夕顔や酔てかほ出す窓の穴 芭 蕉

夕かほや裸ておきて夜半過 嵐 蘭

藻の花をちしみよせたる入江哉 残 香

蘭の花よ飛たく水の濁り哉 此 筋

蓮の葉や心もとなき水離れ 白 雪

客あるを共蓮の蠅かひん 良 品

瓜

朝露よよこれて涼し瓜の土 芭蕉

ほたん

庭ふりや袖又入ても重からず 至曉

早苗

鹿相なる膳の出されぬ牡丹哉 風弦

京入や鳥羽の田植の歸る中 卯亡

早乙女よ結んでやらん笠の紐 闇指

ふとる身の植おくれたる早苗哉 魚日

田植歌まである顔の諷ひ出し 重行

一田つし行めぐりてや水の音 北枝

里の子か燕握る早苗かな 支考

蚊遣火の烟そるしほたる哉 許六

三日月よ草の笠の明よけり 野萩

納涼

涼しさや竹握り行敷つたひ 半殘

登

無葉花や廣葉よむかふ夕涼 惟然

深川の庵よ宿して 史邦

はせを葉や風なさらちの朝涼 史邦

涼しさや駕籠を出ての繩手みち 唐翠

石ぶしや裏門明て夕すしみ 唐翠

涼しさよ牛の尾振て川の中 刀乎

腰かけて中よ涼しき階子かな 酒堂

涼しさや襟より足をふらさける 支考

生酔をねちすくめたる涼かな 雪芝

はせを翁を茅屋よまねき

涼風も出来した壁のこわれ哉 游刀

漫興三句

盛夏

いそかしき中をぬけたる涼かな 全
 立ちあがりく人にまされて涼かな 去
 黙禮よこまる涼や石の上 正
 職人の帷子きたる夕すしみ 土
 涼しきや一重羽織の風たまり 我
 夜涼やひかひの見せは月かさす 里
 かたはみや照りかたまりし庭の隅 野
 季盛る見世のほこりの暑哉 万
 數醫者のいさめすされし 乎
 よ答へ侍る 州
 實よもとの請て寐冷の暑哉 正
 取替の内のあつさや棒つかひ 乙

竹の子

五月雨

煤さかる日盛あつし臺所 怒
 茨ゆふ垣もまらぬ暑かき 素
 草の戸や暑を月よ取かへす 我
 あつさ日や扇をかさす手のほそき 印
 積あけて暑さいやます疊かな 卓
 粘よなる咆も夜のあつさかな 里
 立寄ればむつとらやの暑哉 沾
 筈よぬはるし岸の崩かき 可
 若竹や烟のいつる庫裏の窓 曲
 まら驚や青くもあらず黴の中 不
 さみたれや蠶煩ふ桑の畑 芭
 五月雨や踵よこれぬ磯つたひ 沁

夕立

夕立よさし合けり日傘 拙候
 白雨や蓮の葉たしく池の芦 苔蘇
 夕たちやちらしかけたる竹の皮 曉鳥
 ゆふ立よ傘かる家やまへ町 圃水
 白雨や中戻りして蟬の聲 正秀
 さつと成て啼て去りけり蟬の聲 胡故
 森の蟬涼しき聲やあつさ聲 乙州
 蟬啼やぬの織る窓の暮時分 曉鳥
 籠の目や潮こほるくはつかつは 葉拾
 晝寐して手の動やむ聞かな 松風
 虫の喰ふ夏菜とほじや寺の畑 荆口
 夏瘦もねかひの中のひとつこ 如真

蟬

雑夏 かつを

川狩よい

玄か焼や麥からくへて柳鮫 文鳥
 異草よ家かちかほや園の紫蘇 葛雲
 夕闇はほたるもまざるや酒はやし 水鷗
 せはさところよ老母をや しなひて
 魚あふる幸もあれ漑うちば 馬寛
 梅無きや笹かたむく日の面 望翠
 澤瀉や道付かゆる雨のあて 野章
 蝸牛つの引藤のそよきかな 水鷗
 晋の淵明をうらやむ
 窓形よ晝寐の臺や簞 ばせを
 粘こいな帷子かふる晝寐かな 惟然

貧僧のくるしく冬の寒さ

をふせくよすかなき夏

日の納涼の扇一本よして

世上よ交ひる

帷子のねかひのやすし錢五百

支考

名月

秋之部

名月よ麓の霧や田のくも

はせを

名月の花かど見へて棉田

ことしの伊賀の山中よして名月の夜この二
句をなし出していつれか是いつれか非なら

んと侍りしは此間わかつへからす月をまつ
高根の雲のはれよけりこしるあるへき初
時雨かなど圓位ほうしのたどりやされと麓
の霧横よ水なかれて平田沙くど曇りたる
の老杜か唯雲水のみなりといへるよもかな
へるなるへしその次の棉はたけは言葉重
よして心はなやかありいりし今のこのむ所
一筋の便あらん月のかつらのみやいなるひ
かりを花どちらす斗よとおもひやりたれ
花よ清香あり月よ陰ありて是も詩哥の間を
もれす去からの前の寂寛をむねとし後の風
興をもつはらよす吾こしる何を是非をはか

る事をなさむたし後の人なをゐるへし

支考評

名月の海より冷る田蓑かな	洒堂
明月や西よかしの蚊屋の月	如行
ものくの心根といん月見哉	露沾
而つあらぬいさかひやせんけふの月	智月
名月や長屋の陰て人の行	闇指
明月や更科よりのとまり客	涼葉
明月や灰吹捨る陰もなし	不玉
中切の梨よ氣のつく月み哉	配力
名月や草のくらみよ白き花	左柳

明月や遠見の松よ人もさし	圃水
おかむ氣もさくてたふとやけふの月	山峰
明月や寝ぬ處よの門しめす	風國
名月や四五人乗し船ふね	需笑
老の身の今宵の月も門てみむ	重友
明月よかくれし星のあわれえ	泥岸
伊勢の山田よありてかり	
の庵を思ひ立ける時	

二見まで庵地たつぬる月見哉	支考
芥子蒔と畑まで行かん月見哉	空牙
柿の名の五助と共よ月見哉	如真
山鳥のちつとも寝ぬや壘の月	宗比

名月や里のよはひの青手柴 木枝
 塙よ居て月見なからや庭機 利合
 明月や聲かしましき女中方 丹楓
 明月や何もひろのす夜の道 野萩
 飛入の客よ手をうつ月見哉 正秀

淀川のほとりよ日をくら
 して

舟引の道かたよけて月見哉 丈草
 待宵の月よ床しや定飛脚 景桃

家よ三老女といふ事あり
 亡父將監か秘して傳へ侍
 りしを思ひ出て

七夕

狭捨を闇よのほるやけふの月 沾圃
 露おきて月入あどや塙のやね 馬寛
 鷲かつら月またたらぬ梢哉 里東
 月影や海の音聞長廊下 牧童
 深川の末五本松といふ所
 よ船をさして

川上とこの川まもや月の友 芭蕉
 十六夜のわづかよ闇の初哉 全
 いさよひの闇の間もなしけみの花 猿雖
 更行や水田の上のおまの河 惟然
 星合を見置て語れ朝からず 涼葉
 船形りの雲まいらくやほしの影 東潮

立秋

秋草

たなはたをいかなる神よいはふへき 沾圃
 朝風や薫姫の團もち 乙州
 粟ぬかや庭よ片よる今朝の秋 露川
 秋たつや中よ吹るし雲の峯 左次
 朝露の花透通す桔梗哉 柳梅
 細工よもならぬ桔梗のつほみ哉 隨爻
 女郎花ねひぬ馬骨の姿かき 濁子
 をみなへし鶺鴒坂の杖よたしかれな 馬菟
 一筋の花野よちかし畑道 烏粟
 弓固とる比なれや藤はかま 支浪
 贈芭蕉菴
 百合の過芙蓉と語る命かな 風麥

朝かほ

さよ姫のなまりも床しつまね花 史邦
 枯のほる葉の物うしや鶏頭花 万乎
 鶏頭や鴈の来る時なをあかし 芭蕉
 鶏頭のちる事えらぬ日敷哉 至曉
 折くや雨戸よさの荻のこゑ 雪芝
 鷺の葉や残らす動く秋の風 荷吟
 山人の晝寐をまはれ鷺かつら カニヤマナガ 桃妖
 風毎よ長くらへけり鷺かつら 杉下
 朝かほの替かそへむ薄月夜 田上尼
 あさかほの這ふてまたる柳かな 闇指
 水も有朝顔たもて錫の舟 風麥
 朝貞よまほれし人や鬘帽子 其角

虫

きほうしの傍に經よむいとしかな
 竈馬や顔よ飛つくふくる棚
 火の消て胴よまよふか虫の聲
 秋の夜や夢と尉とさりくす
 みの虫や形よ似合し月の影
 蜻蛉や何の味ある竿の先
 蠅螂や腹をひやする石の上
 蓮の實よ輕さくらへん蟬の空
 ぬけからよならひて死る秋のせみ
 鴈かねよゆらつく浦の苫屋哉
 鶺鴒や走り失たる白川原
 粟の穂を見あくる時や啼鶺鴒

可南
 北枝
 正秀
 水鷗
 杜若
 探丸
 鷲軍
 示峯
 丈草
 馬草
 氷固
 支考

鳥

秋風

稻妻

老の名の有ともしらて四十雀
 秋かせや二番たのこのねさせ時
 雀子の毳も黒むや秋の風
 何かりとからめかし行秋の風
 松の葉や細きよも似す秋の聲
 をのつから草のしなへた野分哉
 ふんりるや野分よむかふはしら賣
 おれくして末は海行野分哉
 ひとりめて留主物すこし稻の殿
 稻妻や雲よへりどる海の上
 明ほのや稻つま戻る雲の端
 いなつまや闇の方行五位の聲

芭蕉
 遊刀
 式之
 支考
 風國
 圃燕
 九節
 猿雖
 一東
 宗比
 土芳
 芭蕉

少年

木質

團栗の落て飛び石ほとけ 爲有
 炭焼又澁柿たのむ便かな 玄虎
 秋空や日和くるのす柿のいろ 酒堂
 つよくと帚をもるゝ履み哉 重翠
 はつ茸や鹽よも漬す一さかり 沾圃

伊賀の山中は何叟の

閑居をどふらひて

松茸や都よちかき山の形 惟然
 まつ茸やしらぬ木の葉のへはりつく 芭蕉
 後屋の塀よすれたり村紅葉 北鯤
 尻すほよ夜明の鹿や風の音 風睡
 寝かへりよ鹿おどろかず鳴子哉 一酌

鹿楓

農業

起しせし人の逃けり蕎麥の花 車庸
 木の下よ狸出むかふ穂懸かな 買山
 さまたける道もよくまじ疇の稻 如雪
 いせの斗從よ山家をどは れて

蕎麥はまた花てもてなす山路哉 芭蕉
 早稻刈て落つきかはや小百姓 乃龍
 山雀のどこやらふ啼霜の稻 斗從
 居りよさよ河原鶉来る小菜畠 支考
 一霜の寒や芋のすんど刈 全
 肌寒き始よあかし蕎麥のくさ 惟然
 百なりていくらの物を唐からし 木節

菊

題畫屏

暮秋

雜秋

大師河原よあそひて樽次
 といふものゝ孫よ逢ひて
 そのつるや西瓜上戸の花の種
 翁卿二百十日も恙なし
 ゑほし子やなと白菊の玉牡丹
 煮木綿の車よ寒し菊の花
 ひかはさやかしく山路の菊の露
 借かけし庵の噂やけふの菊
 廣澤や背負ふて歸る秋の暮
 行秋を鼓弓の糸の恨かな
 行秋や手をひろけたる栗のいか
 五六十海老つゆやして鮫一ツ
 圃友
 沾圃
 蔦車
 濁子
 支考
 兀峯
 丈草
 野水
 乙州
 芭蕉
 之道

栗からの小家作らむ松の中
 あら鷹の壁よ近づく夜寒哉
 残る蚊や忘れ時出る秋の雨
 身ふるひよ露のこほるゝ鞆かな
 更る夜や稻こく家の笑聲
 柿の葉よ焼みそ盛らん薄簪
 本間主馬か宅よ骸骨ともの笛鼓
 をかまへて能する處を書て舞臺
 の壁よかけたりまよと生前のた
 ゐふれあといこのあそひよ殊な
 らんやかかかの鬮腰を枕として終よ
 夢うつしをわかたさるも只この
 圃友
 畦止
 口友
 萩子
 万平
 宗波

生前を定めざるものこ

稲のまやかほのところか薄の穂 はせを

冬之部

時雨

この比の垣の結目やはつ時雨 野坡

まくれ年の又松風の只をかす 北枝

けふはかり人も年よれ初時雨 芭蕉

一時雨またくつをる日影かな 露沾

初しくれ小鍋の芋の煮加減 馬寛

平押よ五反田くもる時雨かな 野明

柴賣やいてまくれの幾廻り 闇指

椀賣も出よ芳野の初時雨 空牙

穴熊の出ての引込時雨哉 爲有

更る夜や鏡よりつる一しくれ 鋤口

石よ置て香炉をぬらす時雨かな 野萩

柿包む日和もなしやひら時雨 露川

高みよりまくれて里の寐時分 里圃

浮雲をそなたの空よをさよしの

日影よりこそあめよあけけれ

沖西の朝日くり出す時雨かな 沾圃

はつ霜や犬の土かく爪の跡 北鯤

ひとつ葉や一葉くの今朝の霜 支考

元祿辛酉之初冬九日素堂

菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふよまら

霜

け侍る事はその比は花いまため
くみもやらす菊花ひらく時刻重
陽といへるこしるよよりかつは
展重陽のためしなさまてもあら
ねは猶秋菊を詠して人くをす
しめられける事まなりぬ

菊の香や庭よ切たる履の底 芭蕉
柚の色や起あかりたる菊の露 其角
菊の氣味ふかき境や敷の中 桃隣
八專の雨やあつまる菊の露 沾圃
何魚のかさしよ置ん菊の枝 曾良
菊畠客も圓坐をよじりけり 馬寛

柴桑の隠士無絃の琴を断しを思
ふよ菊も輪の大ならん事をひさ
ほり造化もうはふよ及はし今そ
の菊をまなひてをのつからなる
を愛すといへ共家よ菊ありて琴
さしかけたるよあらずやとて人
見竹洞老人素琴を送られしより
是を夕よし是を朝よしてあるの
聲なきよ聴きあるの風よあらへ
あひせて自らほこりぬ

うるしせぬ琴や作らぬ菊の友 素堂
水仙や練堀われし日の透間 曲翠

章

なを清く咲や葉かちの水仙花 氷固
水仙の花のみたれや藪やしき 惟然

范蠡か趙南のこしるをい
へる山家集の題よ習ふ

一路もこほさぬ菊の氷かな ばせを

山茶花の元より開く歸り花 車庸

冬梅のひとつふたつや鳥の聲 土芳

山茶花も落てや雪の散つはき 露笠

おもひなし木の葉ちる夜や星の數 沾徳

星さえて江の鮒あかむ落葉哉 露沾

冬川や木の葉の黒き岩の間 惟然

麓より足さわりよき木の葉哉 枳風

本柳坊宗比の庵をたつね

て

はいるより先取てみる落葉哉 一 道

冬枯

枯はてし霜よはちすやをみなへし 杉風

牛の行道の枯野のはしめかな 桃醉

冬枯よ去年きてみたる友もなし 乃龍

草枯よ手うつてたしぬ鳴もあり 利牛

野の枯てのはす物なし鶴の首 支考

風

木からしや色よも見へず散もせず 智月

凡や背中よかると牛の聲 風訂

木枯や刈田の畔の鉄氣水 惟然

こからしや藁まさらす牛の角 塵生

夷講

鳥附いを

惠比須講 鶯も鴨も成まけり 芭蕉
 能登の海を見て 句空
 塵濱よたしぬ日もなと浦衝 蔦車
 追かけて霞よころふ千鳥哉 丈草
 小夜ちどり庚申まぢの舟屋形 閣指
 入海や碇の笠よ啼千鳥 芭蕉
 籠よつしみてぬくし鴨の足 乍木
 たつ鴨を犬追かくるつしみかな 利雪
 汲汐よころひ入へき生海鼠哉 車庸
 うかくと海月よ交るあまこ哉 岱水
 見へ透や子持ひらめのうす氷

冬月 附余

埋火

一鹽よ初白魚や雪の前 杉風
 かくふつや腹をならへて降霰 拙候
 杜夫魚の河豚の大さよて
 水上よ浮ふ越の川よのみ
 あるうかなり
 喰ものや門うりありく冬の月 里圃
 あら猫のかけ出す軒 冬月 丈草
 何事も寝入るまでなり紙ふすま 小春
 水仙や門を出れ江の月夜 支考
 埋火や壁よの客の影ほらし 芭蕉

雪

侘しさの夜着を懸たる火燧かき
 自由さや月を廻行置火燧
 初雪や門は橋あり夕間暮
 朝とみや月雪うすき酒の味
 雪あられ心のかゝる寒さ哉
 鷓鴣家いどさるしはたれ雪
 雪垣やまらぬ人よの霜のたて
 ふたの予も草鞋を出すやけふの雪
 片壁や雪降かゝるすさ儂
 思はすの雪見や日枝の前後
 髪剃の降来る雪か比良のたけ
 伊賀大和かさなる山や雪の花

桃先
 洞木
 其角
 全
 夕菊
 祐甫
 萬車
 支考
 圃吟
 丈草
 陽和
 配力

百八十四

神樂 鉢たしき

夜神樂は齒も喰まぬ寒哉
 食時やかならず下手の鉢たしき
 鉢たしき干鮭賣をすしめけり
 嫁入の門も過けり鉢たしき
 狼を送りかへすか鉢たしき
 煤はさや鼠追込黄楊の中
 煤はさやあたまよかふるみなと紙
 才覺な隣のかしや煤見舞
 煤はさやわすれて出る鉢扣
 煤掃や折敷一枚踏くらし
 餅つさや火をかいて行男部や
 餅つさやあかどかねたる鶏のとや

史邦
 路草
 馬寛
 許六
 沾圃
 殘香
 黄逸
 馬寛
 闇如
 惟然
 岱水
 嵐蘭

煤掃 附 餅つさ

百八十五

歲暮附
節季候
衣配

もち搗の手傳ひするや小山伏 馬佛
こね返す道も師走の市のさま 曾良
門砂やまきてまはすの洗ひ髪 里東
賣石やとつてもいなす年の暮 革士
猿も木よのほりすますやとしの暮 車來
大年や親子たはらの指荷ひ 万乎
袴さぬ鞆入もあり年のくれ 季由
年の市誰を呼らん羽織どの 其角
打こほす小豆も市の師走哉 正秀
引結ふ一つふ銀やとしの暮 茨子
桶の輪のひとつあたらし年の暮 猿雖
天鵝毛のさいふさかして年の暮 惟然

預萩よ筆を結せてとしの暮

此句は圖司呂丸か羽く呂
より京よのほるとて伊勢
よもまうて侍りけれいそ
のとしの暮かゝる事もい
ひ殘して今はなき人とい
なりし

盗人よ逢ふた夜もあり年のくれ 芭蕉
余所よねてとんすの夜着の年忘 支考
漸よ寐所出來ぬ年の中 土芳
節季候や弱りて歸る敷の中 尙白
節季候の拍子をぬかす明屋哉 桃後

雑冬

裁屑の末の子かもつさぬ配 山 峰
 一まきり啼て静けし除夜の鶏 利 合
 小屏風よ茶を挽かゝる寒さ哉 斜 嶺
 植竹よ河風さむし道の端 土 芳
 井の水のあたゝかよなる寒さ哉 李 下
 寒聲や山伏村の長つしみ 仙 杖
 霜はしらをのかがけしや土龍 圃 仙
 火燧より寐は行時の夜半哉 雪 芝
 山陰や猿か尻抓し冬日向 工 谷
 狙板よ人參の根の重さ哉 沾 圃
 菊刈や冬たたく薪の置所 杉 風
 釋教之部 附追善 哀傷

涅槃

灌佛

魂祭

涅槃像あかき表具も目よたしす 沾 圃
 ねいん會や皺手合る珠數の音 芭 蕉
 山寺や猫守り居るねいん像 石 撒
 貧福のまとをしるや涅槃像 山 蜂
 灌佛やつししならふる井戸のやね 曲 翠
 散花や佛うまれて二三日 不 玉
 灌佛や釋迦と提婆の従弟とし 之 道
 喰物もみな水くさし魂まつり 嵐 雪
 寐道具のかたぐやうき魂まつり 去 來
 やま伏や坊主をやとよ玉まつり 沾 圃
 甲戌の夏大津よ侍しをこ
 のかみのもとより消息せ

られけれの舊里は歸りて
盃會をいとなむとて

家のみな杖はまら髪の蔓參

芭蕉

悼少年二句

かなしさや麻木の箸もおとなくみ
その親を去りぬその子の秋の風

惟然
支考

かまぐらの龍口寺は詣て

首の座の稻妻のするその時か

木節

はか原や稻妻やとる桶の水

支梁

御影講

臘八

胸をさぐりて見れば納豆汁
何のあれかのあれけふの大師講

沾圃
許六
如行

洛東の眞如堂よして善光

寺如來開帳の時

雜題

涼しくも野山は見つる念佛哉

去來

有ると無さと二本さしけりけしの花

智月

けし畑やちりまつまりて佛在世

乙州

ものしふは川越向ふや富士もうて

重翠

手まはしは朝の間涼し夏念佛

野坡

食堂は雀啼なり夕まくれ

支考

旅之部

送別

元祿七年の夏はせを翁の

別を見送りて

麥ぬか又餅屋のみせの別かき 荷 兮
別るしや柿食ひなから坂の上 惟 然

許六か木曾路よおもむく

時

旅人のこしるよも似よ椎の花 芭 蕉

留 別

洛の惟然か宅より古郷よ

歸る時

鼠ども出立の芋をこかし鳥 丈 艸

結の子のえら魚返る別かな 芭 蕉

甲斐のみよよ詣ける時

宇都の山邊よかすりて

年よりて牛よのりけり葛の路 木 節

稻つまやうさ世をめぐる鈴鹿山 丈 艸

よへもなくつめたつ蟬や旅の宿 野 徑

出羽の國よおもむく時み

ちのくのさかひを過て

そのかみの谷地なりけらし小夜礎 公 爲

十圍子も小つふよなりぬ秋の風 許 六

大名の寐間よもねたる夜寒哉 全

くま野路

くるしさと茶よのかつへぬ盆の旅 曾 良

つはくらは土で家する木曾路哉 猿 雖

明ほのいたちのなくらし旅姿 我 峯

煎りつけて砂路あつし原の馬 史邦

回國の心さしも漸く伊

勢の國よいたりて

文臺の扇ひらけの秋涼し 呂丸

我蒲團いたしく旅の寒かな 沽圃

常陸の國あしあらひとい

ふ所は行暮てやどり求ん

とせしよその夜いさる事

ありとて宿をかさくりけ

れの一夜別時の軒の下よ

かしまりふして

椽よ寐る情や梅よ小豆粥 支考

はつ瓜や道よわつらふ枕もと 全

元祿三年の冬栗津の脚巷

より武江よおもむくとて

島田の驛塚本か家よいた

りて

宿かりて名をなのらするしくれ哉 はせを